

先生方とともに  
高校生の今と未来をつなぐ

〈ビュー21〉

高校版

2017  
Volume 4

10月

# VIEW21

## 差異と発問

### 特集

「学校教育デザイン」を描く③

資質・能力を育む  
授業と評価のあり方

主体的・対話的で深い学びへ  
実践 アクティブ・ラーニング

小論文

岩手県立大船渡高校 梨子田 喬

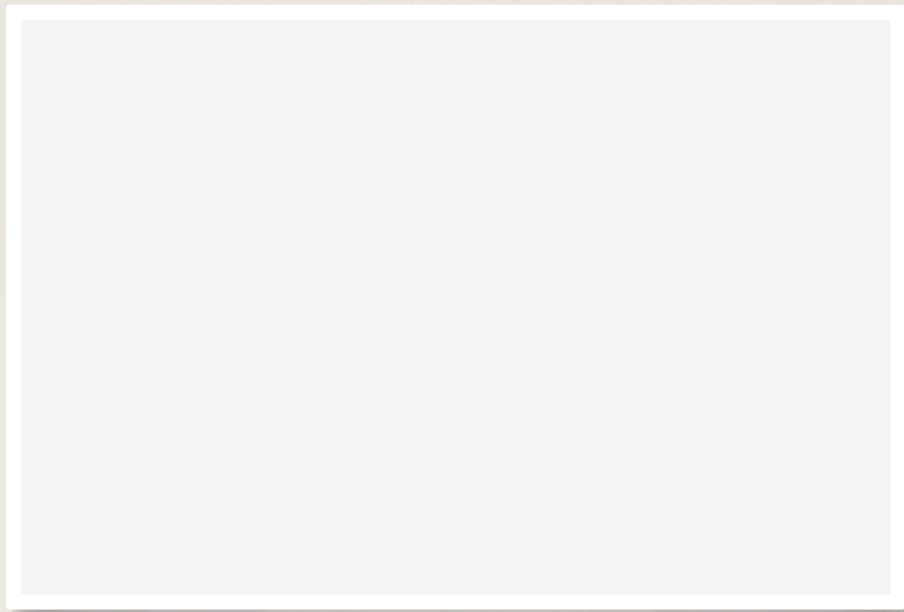
現代文

宮崎県立高鍋高校 三浦 章子

指導変革の軌跡

茨城県・私立大成女子高校

石川県立野々市明倫高校



## ともに成長していく

**生徒** 高校入学後、八巻先生の最初の授業で「数学では毎回4人1組でのグループ学習をするから、まずはそのグループのつくり方をみんなで決めよう」と言われた時にはびっくりしました。

**生徒** 4人で話し合って1つの答えを出すという形態にも戸惑ったし、先生はヒントしか与えてくれないので自分たちで考えるしかなくて、最初は泣きそうでした。今では、解法を見つけた人が前に出てみんなに教えて、助け合っているけれど(笑)

**先生** 一度先生が教えてしまうと、「最後は先生が教えてくれる」という甘えが出てしまうからね。

**生徒** 最初は「なぜ答えを教えてくれないんだろう」と思っていたけれど、毎回メンバーの考えを聞き、自分で深く考えていくと、単元の本質を理解できるようになっていることに気づきました。今では分からない問題を解くのが面白くて、数学にのめり込んでいます!

**生徒** ただ、グループ学習って、話すのが苦手な人の集まりだと沈黙が続いてつらいのですが、それについて先生はどのように考えていますか。

**先生** それも、頑張っしてほしいところなんだ。自分た

ちの力でその壁を乗り越えてこそ、みんなの成長があると考えているよ。

**生徒** みんなにはいろいろな考えがあって、それを共有して、また考えて答えを出す。それが“学ぶ”ということなのだと感じています。ほかにはない授業ですが、先生はどうして始められたのですか。

**先生** 先生の話を一方向的に聞くだけで、生徒に本当に力がつくのかと考えるようになって、前の学年でグループ学習を取り入れてみたら、みんな生き生きと取り組んでくれて……それなら普通の授業で取り入れようと思ったんだ。本格的な導入は初めてだったから、みんなにも頑張ってもらって授業公開をたくさんしたし、みんなから直接意見を聞きながら、改善を重ねてきた。だから、先生の授業は、みんなと一緒に勉強しながらつくってきたのだと思っているよ。

**生徒** 確かに、学年集会などでも、話を聞いているんだけど頭に入ってこないです。

**先生** じゃあ、次の集会では、資料を5分間で読んでもらってから、質疑応答形式にしようか。

**生徒** 賛成! 読めば分かることに説明はいらないです!

**八巻智洋先生** 教職歴10年。同校に赴任して11年目。特別進学コース主任。進路指導部。数学科。

**福島県・私立尚志高校** 全日制/普通科・情報総合科/共学/1学年425人/2017年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、山形大、福島大、筑波大、会津大などに24人が合格。私立大は、専修大、法政大、立命館大などに延べ262人が合格。

2 特集

「学校教育デザイン」を描く③

# 資質・能力を育む 授業と評価のあり方

4 資質・能力を育む授業と、  
それを見取るための評価とは

8 座談会  
「差異」に出合わせる発問で、  
生徒を主体的にし、深い学びに誘う

関西大学 教育推進部教授 森 朋子

静岡県立御殿場高校 美那川雄一 / 岡山県立倉敷青陵高校 田中誠一郎

14 授業・評価実践  
学校教育目標「8つの力」を育成する  
授業と評価のあり方を探る  
山梨県立吉田高校

22 主体的・対話的で深い学びへ 実践 アクティブ・ラーニング

22 小論文  
岩手県立大船渡高校 梨子田喬  
生徒同士の協働で小論文を作成し、  
相互に評価させることで考え続ける姿勢を育む

26 現代文  
宮崎県立高鍋高校 三浦章子  
教材の特性や育てたい力を基に活動の形を柔軟に検討し、  
言葉を通して思考する力を高める

30 指導変革の軌跡

30 茨城県・私立大成女子高校  
キャリア教育  
学校設定教科を通して生徒のキャリア設計を支え、  
主体的な進路意識を醸成

34 石川県立野々市明倫高校  
進学実績の向上  
進路指導課と学年団が連携して指導改善を推進し、  
過去最高の進学実績を実現

38 改良！ 指導ツール ビフォーアフター

全学年  
進路講演会 振り返りシート

42 大学生による高校生のための 大学の学び 最新ナビ

42 首都大学東京 都市環境学部 分子応用化学コース  
主体的に学び続ける力を育成し、  
世界で活躍できる化学者を育成

44 山口県立大学 社会福祉学部  
地域に深く入り込んで実践を重ね、  
福祉のマインドとスキルを身につける

46 これからの会議・研修のあり方、つくり方

前向きになれる振り返り

48 特別レポート

ベネッセコーポレーション「現代人の語彙に関する調査」結果分析  
アクティブ・ラーニングの経験が  
思考力・表現力を支える「語彙力」にも影響

60 Reader's VIEW

巻末 教師を育てた言葉たち

「誰か1人でも見ているなら続けなさい」  
愛媛県・私立聖カタリナ学園高校 中本幸太

今月の表紙メッセージ

差異と発問

◎本誌・特集において4号にわたって発信する『『学校教育デザイン』を描く』。3回目の今号では、いよいよ授業と評価という実践のフェーズに入ります。すなわち、資質・能力を育成する授業と評価とはどのようなものなのか、その実現のために教師に求められることや実践のポイントは何か、考えてまいります。キーワードは「差異と発問」。その2つから先生方はどのようなことをイメージされるでしょうか。それは、今号の特集を読んだ後でどのように変わるでしょうか。この「発問」を通じた「差異」もぜひお考えになりながらお読みいただくと幸いです。

『VIEW21』高校版  
編集長 柏木 崇

<http://berd.benesse.jp>

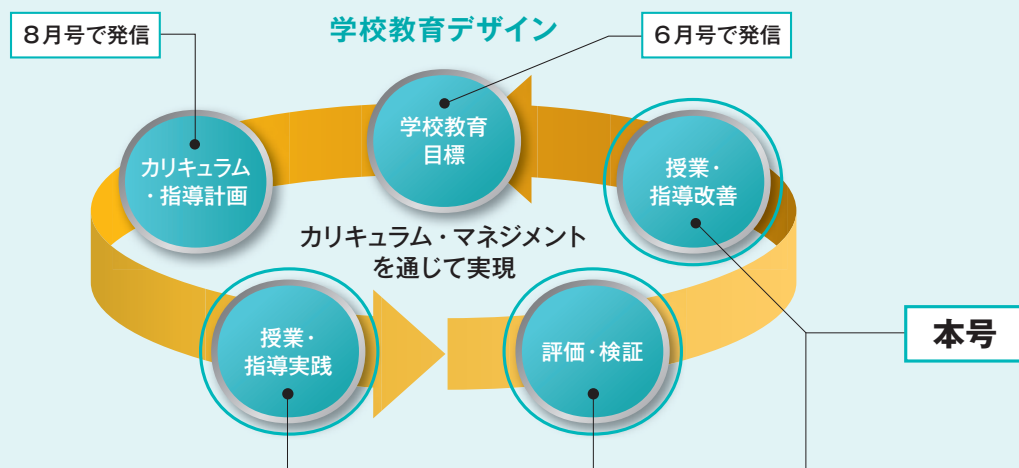
本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます  
印刷製本/ (株) 協同プレス 編集協力/ (有) ベンダコ 執筆協力/ 中丸 満、二宮良太 撮影協力/ 荒川 潤、川上一生、谷口 哲、筒井岳彦、藤木潤一、福山 哲、ヤマグチイッキ  
\*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます  
\*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます  
©Benesse Corporation 2017

# 「学校教育デザイン」を描く③ 資質・能力を育む 授業と評価のあり方

本誌6月号において、これからの学校教育目標のあり方を、  
8月号において、学校教育目標を達成するための  
これからの教育課程・教育活動計画のあり方を考えてきた、  
次の自校の姿を描く「学校教育デザイン」。  
今号は、いよいよ実践のフェーズに目を向ける。  
学校教育目標や次期学習指導要領で目指す資質・能力を育成する授業、  
そして、目指す資質・能力が育めたのかを見取ることのできる評価とはどのようなものなのか。  
それらを実現するために求められる視点や実践のポイントとともに考えていく。

## 2017年 特集の年間テーマ

2020年度・22年度に向けて、次の自校を創るために必要な視点を押さえた  
「学校教育デザイン」を描く



## 本号のテーマ

学校教育目標や学習指導要領で目指す資質・能力は、  
どのような**授業**や**評価**で育まれるのか。  
その実現のために教師に求められること、実践のポイントは何か。

## 1 資質・能力を育む授業と、それを見取るための評価とは

【P.4～7】

## 授業

「主体的・対話的で深い学び」を実現する

実現のポイント

- ①これまでの授業を「主体的・対話的で深い学び」の視点で捉え直す
- ②「主体的」「対話的」「深い」の3つの学びの視点は、単元や題材のまとまりの中で実現させる
- ③各教科等の特質に応じた「見方・考え方」によって学びを深める
- ④教師が、生徒の思考を深めるための発言を促したり、気づいていない視点を提示したりする

## 評価

「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の  
3つの観点で評価する

実現のポイント

- ①3つの観点での評価は、単元や題材のまとまりの中で行う
- ②多様な方法で、多面的・多角的に評価する

## 2 その実現のために教師に求められること、実践のポイントは何か

現場の教師や識者の声から見てきたキーワード「**差異**」と「**発問**」を軸に、  
資質・能力を育む授業と評価を実現する視点や実践のポイントを考える

座談会で  
視点を探る  
【P.8～13】



関西大学  
教育推進部  
教授  
森 朋子



静岡県立  
御殿場高校  
美那川雄一



岡山県立  
倉敷青陵高校  
田中誠一郎

「差異」に出合わせる発問で、生徒を主体的にし、深い学びに誘う

事例から  
実践のポイントを  
考える  
【P.14～21】

学校教育目標「8つの力」を育成する授業と評価のあり方を探る  
山梨県立吉田高校

実践の進め方◎3人の教師が、育成したい「8つの力」を基に授業計画を作成した上で、授業を実践。授業後は、教師と生徒と一緒に振り返りを行い、次の授業と学びに生かすという試みに取り組んだ。



▲授業後の教師と生徒による振り返りの様子

# 資質・能力を育む授業と、 それを見取るための評価とは

資質・能力は、どのような授業によって育まれるのか。そして、どのような視点・方法で資質・能力を評価していけばよいのか。中央教育審議会の答申（\*）と現場の声を基に考えていく。

## 「学校教育デザイン」を描き 次代の自校を構築する

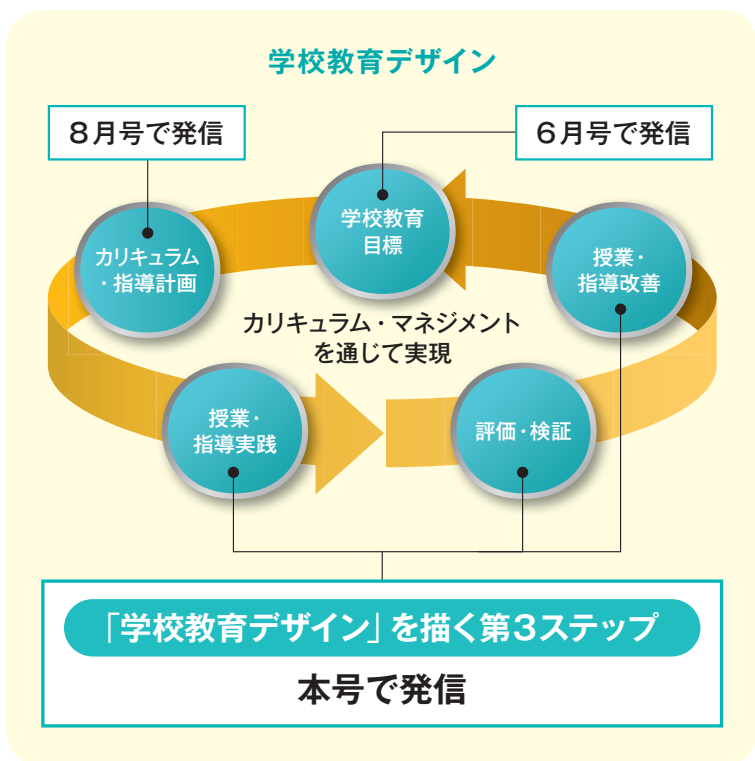
本誌6月号の特集では、今後の予測困難な時代においても人生を切り拓いていける力を育むため、自校の生徒に必要な資質・能力（コンピテンシー）を明確化し、それらを育む指導を確立できるように、次の自校の姿を描く「学校教育デザイン」という考え方を示した。それは、学校教育目標から教育課程・指導計画の策定、授業・指導実践、その評価・検証、指導改善までのサイクルを、教師間で連携し、地域や保護者等の外部資源も活用しながら、カリキュラム・マネジメントの視点を通じて

学校全体で回していく営みだ（図1）。

同号では、その第1ステップとなる「学校教育目標」のあり方を考え、学習指導要領を受け止めつつ、校訓や校是、建学の精神、学校文化（校風）など、教育の根幹を成す「不易」の視点と、社会の変化や地域の実情、生徒の姿といった「流行」の視点の双方を踏まえて、資質・能力の形で明確化する必要性を示した。

続く8月号では、学校教育目標の達成を図るために作成される「教育課程」と、教科活動、そして学校行事・部活動等の教科外活動を行う時期、指導の観点、手法などをまとめた「教育活動計画」のあり方について

図1 「学校教育デザイン」概念図



\*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」



「深い学び」は相互に影響し合うものだが、授業づくりにおいてはそれぞれ固有の視点である。それらは、1コマの授業の中ですべて実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で生徒の学びが3つの視点を満たすものとし、それぞれの視点の内容と相互のバランスを配慮した単元計画とすることが重要になる。

③各教科等の特質に応じた「見方・考え方」によって学びを深める  
「見方・考え方」(図5)は、新しい知識・技能を既に身につけた知識・技能と結びつけながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものにし、自分と社会とのかわり方の視座を形成したりするために重

図4 「主体的・対話的で深い学び」とその例

主体的な学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

- 例
  - 学ぶことに興味や関心を持ち、毎時間、見通しを持って粘り強く取り組むとともに、自らの学習をまとめ振り返り、次の学習につなげる
  - 「キャリア・パスポート(仮称)」などを活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりする

対話的な学び

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手がかりに考えることなどを通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

- 例
  - 実社会で働く人々が連携・協働して社会に見られる課題を解決している姿を調べたり、実社会の人々の話を聞いたりすることで自らの考えを広げる
  - あらかじめ個人で考えたことを、意見交換したり、議論したりすることで新たな考え方に気がついたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする
  - 子ども同士の対話に加え、子どもと教員、子どもと地域の人、本を通して本の作者などとの対話を図る

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

- 例
  - 事象の中から自ら問いを見だし、課題の追究、課題の解決を行う探究の過程に取り組む
  - 精査した情報を基に自分の考えを形成したり、目的や場面、状況等に応じて伝え合ったり、考えを伝え合うことを通じて集団としての考えを形成したりしていく
  - 感性を働かせて、思いや考えを基に、豊かに意味や価値を創造していく

\*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」を基に編集部で作成

要となる。資質・能力の3つの柱(知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等)によって支えられた見方・考え方が、習得・活用・探究という学びの過程の中で働くことを通じて、資質・能力のさらなる伸びや新たな資質・能力の獲得につながり、それによって見方・考え方が一層豊かなものになるという相互の関係にある。

④教師が、生徒の思考を深めるための発言を促したり、気づいていない視点を提示したりする  
指導を工夫して知識・技能を教えながら、生徒の思考を深めるために発言を促したり、生徒が気づいていない視点を提示したりと、これまでの指導にとらわれずに学びに必要な指導のあり方を追究し、生徒に必要な学習環境を積極的に設けていくことが求められる。

生徒の実態を見て、絶え間なく指導の工夫を重ねる  
既に高校現場でも、多くの学校が「主体的・対話的で深い学び」を授業に取り入れ、様々な試行錯誤が行われている。大学入試改革が進み、

図5 各教科等の特質に応じた見方・考え方のイメージ(抜粋)

言葉による見方・考え方	自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉え、その関係性を問い直して意味づけること。
社会的事象の地理的な見方・考え方	社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結びつきなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連づけること。
社会的事象の歴史的な見方・考え方	社会的事象を、時期や推移などに着目して捉え、類似や差異などを明確にしたり、事象同士を因果関係などで関連づけたりすること。
数学的な見方・考え方	事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること。

\*中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」を基に編集部で作成

大学入試が知識・技能のみならず、思考力や表現力、主体性等の資質・能力を評価する試験に変わりつつある今、講義型の授業から、生徒主体の活動を含む授業への転換が一層進むことが期待されている。

ただ、学習活動を生徒の自主性に委ね、学習成果につながらない「活動あつて学びなし」と批判される授業となってしまうたり、特定の教育方法にこだわるあまり、指導の

型をなぞるだけで意味のある学びにつながる授業になってしまったらといったケースも見られる。

答申の中に示された「『主体的・対話的で深い学び』の実現とは、特定の指導方法のことで、学校教育における教員の意図性を否定することでもない。人間の生涯にわたって続く『学び』という営みの本質を捉えながら、教員が教えることにしっかりと関わり、子供たちに求められる資質・能力を育むために必要な学びの在り方を絶え間なく考え、授業の工夫・改善を重ねていくことである」という点をしっかりと押さえておくことが重要だ。

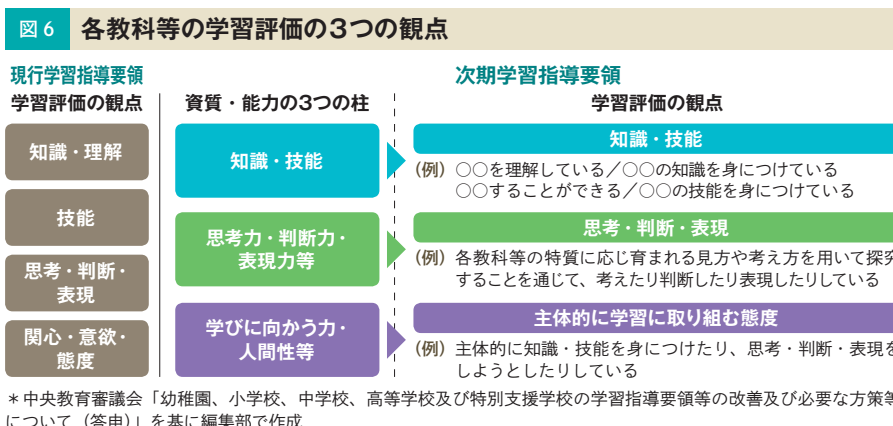
### 3つの観点での評価は単元のまとまりの中で行う

次に、評価のあり方について見ていく。次期学習指導要領では、各教科において、学習状況を分析的に捉える「観点別学習状況の評価」（以下、観点別評価）と、総括的に捉える「評定」とを、学習指導要領に定める目標に準拠した評価として行うことが求められている。

観点別評価は、各教科とも、「知識・

技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点で評価する（図6）。ポイントとなるのは次の2点だ。

①「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点での評価は、単元や題材のまとまりの中で行う



毎回の授業で3つの観点すべてを評価するのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で、指導と評価を一体化させて、単元計画、授業づくりを行うことが求められる。

評価が難しいという声もある「主体的に学習に取り組む態度」については、単元や題材のまとまりの中で、生徒が見通しを持って学習に取り組む、その学習を振り返る場面を設定し、見取るといった方法などが考えられる。学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方など、形式的な活動の結果のみで評価したりせず、内面にある主体性を見える化する授業・指導、すなわち、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業・指導方法の改善が求められる。

②多様な方法で、多面的・多角的に評価する

指導と評価の一体化を図る中で、評価の手法も、ペーパーテスト以外に、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の製作といった多様な活動に取り組みせる「パフォーマンス評価」などを取り入れ、多面的・多角的な評価を行う必要がある。さらに、総括的な評価

のみならず、生徒個々の学びの多様性に応じて、学習の過程で形成的な評価を行うことも求められる。例えば、日々の記録やポートフォリオなどによって、教師と生徒の両者が資質・能力の伸びを把握できるだろう。

また、生徒が自らの学習状況やキャリア形成を見直し、振り返りを行う自己評価を、教科の特質に応じて学習活動の1つとして行うことも重要だ。その際、教師が適宜、生徒と対話的にかかわるようにしたい。生徒は教師の言葉によって自身を相対化でき、学びをさらに深めることにつながるだろう。

\*

観点別評価は、小・中学校では実践されているが、高校では知識量のみを問うペーパーテストの結果や、特定の活動の結果などのみに偏重した評価が行われているのではないかと懸念も示されている。そのような現状を変え、資質・能力を育成する授業と評価を実現していくために、教師には何が求められるのか。次ページからの「主体的・対話的で深い学び」や資質・能力の評価を追究する現場の教師と研究者の語り合いを通じて考えていく。

# 「差異」に出合わせる発問で、生徒を主体的にし、深い学びに誘う

資質・能力を育成する授業、すなわち「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、教師に求められることは何か。また、そのような授業における評価は、どのように進めていけばよいのか。

「主体的・対話的で深い学び」を授業で追究している2人の教師と、子どもの学習プロセスについて研究している研究者が語り合った。

## 生徒が自分で考え、表現する場を設ける

**柏木** まずは、資質・能力を育成する授業という視点で、どのような授業を「実践されているのか、お聞かせください。

**美那川** 私は、深い学びは主体的で対話的であるからこそ実現するものだと考え、授業づくりをしています。担当科目は世界史ですが、歴史は「資料（史料）を読み、考えて、書く」として研究を深めてきた分野です。「考える」とは、歴史的事象を時系列で分析したり、因果関係を読み取った

り、ある時代の文脈から事象を捉えたりすることです。その際、1人で考えるよりも、グループで対話をした方が多様な視点が出て、学びが深まります。ですから、生徒が問いに

対する解答をつくるために、教科書などで調べ、グループで対話しながら考えを深め、最後に自分なりの答えとなる文章を書くという授業を行っています。そうした学びのプロセスを経ることで、おのずと資質・能力が育まれていくと考えています。

**柏木** それは、まさに「社会的事象の歴史的な見方・考え方」を働かせる授業かと思いますが、前任校の進

学校と現任教と授業に違いはあるのでしょうか。

**美那川** 根本的には同じです。違いは、現任教では生徒の半数が卒業後に就職するため、大学入試で必要とされる知識を身につけるよりも、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力、市民性などの育成を重視している点です。異動して約4か月ですが、生徒の論述を見ると、「資料を読み、考えて、書く」力は着実に育ってきていると手応えを感じています。

**柏木** 田中先生はどのような授業をされていますか。

**田中** 私は、授業こそ生徒が力を



関西大学  
教育推進部教授  
**森 朋子**  
もり・ともこ

専門は、学習研究、学習理論、教育方法学。島根大学教育開発センター長等を経て、現職。

ける場となるよう、最初に問いを出し、生徒が考え、表現する場を設けるよう授業改善を進めています。教師の話聞いて、板書を書き写すだ



**静岡県立御殿場高校**  
**美那川雄一**  
みながわ・ゆういち

教職歴 14 年。同校に赴任して1年目。担当教科は地理歴史(世界史)。情報研修課。

**静岡県立御殿場高校**

- ◎3つの専門科から成る実業高校。2年次から希望進路や適性に応じたコースに分かれる。緊急携帯食の開発とその取り扱いDVDの製作など、3学科の協働による産学・地域連携を行っている。校訓は「質実剛健にして美しく」。
- ◎設立 1901(明治34)年
- ◎形態 全日制/情報システム科・情報ビジネス科・情報デザイン科/共学
- ◎生徒数 1学年約200人
- ◎2017年度進路実績(現役のみ) 4年制大は、山梨大、日本大などに23人が合格。短大、専門学校進学62人。就職104人。
- ◎URL <http://www.edu.pref.shizuoka.jp/gotemba-h/home.nsf>

けでは、家庭学習を余程自分でうまく進められる生徒でない限り、力はつかないと思うからです。授業づくりで留意しているのは、まず、生



**岡山県立倉敷青陵高校**  
**田中誠一郎**  
たなか・せいいちろう

教職歴 23 年。同校に赴任して3年目。担当教科は国語。進路指導課主任。

**岡山県立倉敷青陵高校**

- ◎学校経営目標に「高質な学力の養成」を掲げ、「知徳体」の円満な発達を図る「文武不岐」を重んじる教育を推進。2017年度、岡山県「アクティブ・ラーニング推進委員会研究協力校」。
- ◎設立 1908(明治41)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2017年度入試合格実績(現浪計) 国立大は、東京大、京都大、大阪大、岡山大、九州大などに246人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ440人が合格。
- ◎URL <http://www.seiryo.okayama-c.ed.jp>

徒に育みたい力を明確にすることで。担当教科の国語は、「授業で何を学んだか」と聞くと、作品名を挙げる生徒が大半であり、生徒が授業で身につけた力を自覚しにくい教科だと思っています。そこで、例えば、「他者意識を持って論理的に発表する力」など、身につけさせたい力を授業の目標として立て、それに基づいた授業づくりをする。そして、授業における生徒の様子から活動の成果を検証し、次の授業に生かすということを繰り返して、資質・能力を育む授業のあり方を模索しています。

### 授業中のアウトプットが 生徒の学びの質を高める

森 お二人とも、何を教えるかだけではなく、生徒に身につけさせたい資質・能力を明確にした上で授業づくりをされており、その目標の実現のために生徒が主体となる活動を取り入れられています。生徒の様子は、



『VIEW21』高校版  
編集長  
**柏木 崇**  
かしわぎ・たかし

以前と変化は見られるでしょうか。  
**田中** 本校の生徒は、講義型の授業でも自分で考えを深められると思いますが、グループ学習を取り入れたことよって、他者の考えを聞いた上で自分の考えを整理できるようになり、さらに考えを深められているようです。私の場合、生徒が自分で表現して初めて力がつくと考えて、生徒に解答を板書させて全体の中で添削をすることはありますが、教師の模範解答はほとんど示しません。生徒から不満が出るだろうと予想していましたが、生徒が考える時間を十分に設けたためか、「自分の考えを深めてから解答できたのがよかった」といった声が上がっています。教師の模範解答よりも、他者の意見を踏まえ自分で考えることが学びになると、生徒自身も実感しているようです。  
**美那川** 1学期の終わりに生徒にアンケートを取ったところ、「授業がよく分かる」「楽しくて、集中できます。本校の生徒は、教師の話をしつと聞くような授業があまり得意ではありませんから、グループ学習を中心とすることで、前向きに学びに取

り組んでいると感じています。

**森** 生徒のアウトプットの機会を授業中に多く設けることで、授業の進め方も変わったのではないのでしょうか。

**田中** 生徒が学習内容をどの程度理解しているのか、どこでつまづいているのかといったことが把握しやすくなり、授業を進めながらも、生徒の状態に応じて指導を変えるようになりました。

**美那川** 私も、生徒がグループ学習をしている間は机間巡視をして、生徒たちの対話を聴き、書いた内容をチェックして、その後の授業展開を考えます。私は講義型の授業があまり得意ではなく、初任当時は準備してきた内容を話すだけで精いっぱいでしたが、今は生徒を丁寧に見取った上で授業ができています。

**森** これまで定期考査や小テストで確認していたことを授業中に把握できるようにすることは、生徒の学びの質を高める上で重要です。生徒の課題に早めに対応できるだけでなく、理解が十分であれば進度を速めて、さらにレベルの高い学びを提供できます。主体的・対話的で深い学びは、生徒・教師双方に利点があると思います。

## 「差異」に出合わせるための大きな問い

**柏木** お二人とも「問い」が生徒の学びの起点となっています。「問い」づくりの工夫をお聞かせください。

**田中** どの生徒も考えられるようにと、問いを小刻みに出して、最終的な考察に結びつける方法があります。それは教師が生徒の思考を誘導することになります。そこで、私は、単元の目標について生徒が自ら考えられるような大きな問いを立てています。ポイントは、「差異」を生じさせるような問いとすることです。自分と他者の違い、過去の自分と今の自分の違い、筆者と自分の違いなど、多面的・多角的に差異に出合い、メタ認知（\*1）できれば、自ら考えを深めていくことができます。

例えば、現代文で、教訓めいた話ではない、ささやかな日常の一場面を描いた短編小説を読み、「文学の価値」を考察する授業を行いました（図1）。まず、自分が今までに読んだ文学の中で最も印象深い作品を振り返った上で、自分にとって「文学」とはどのような存在なのかを考えさせ

図1 田中先生の授業プリント 2年次現代文 単元名「文学は何のためにあるのか？」

「全く正解の見えないオープンエンドの問いでは、答えが多様であっても差異を感じられず、『いろいろな意見があるよね』で終わってしまいます。正解が1つではなく、かつ複合的な差異が生じるような問いを考えることが、授業準備の大半を占めます」と、田中先生は語る。

「文学は何のためにあるのか？」 インTRODクシオンシート

組 番氏名（ ）

1 これまでの人生で読んだ「文学」(言語によって人間の外界および内界を表現する芸術作品・詩歌・小説・物語・戯曲など)からなる「広辞苑」より)の中で、最も印象深いものは何ですか。具体的な作品を挙げてみましょう。また、その作品はあなたにとってどのような意味や価値を持っていますか。簡単に書いてみましょう。

2 これまでの人生で、「文学」は、あなたにとってどのような存在でしたか。また、今現在「文学」に対してどのような思いを持っていますか。簡単に記述してみましょう。

3 川上弘実「水かまきり」とめてみましょう。

「文学は何のためにあるのか？」 シンクシート

組 番氏名（ ）

ステップ1 「水かまきり」を、ストーリーのみに絞って最も端的に表す次のようになる。ある日、わたしは、怪我で選手生命を絶たれた元プロ野球選手「ケン坊」と河原を散歩した。これと「水かまきり」を比較して、「小説を小説たらしめているものは何か」を考察して、まとめてみよう。なお、本文中の表現の特徴に留意して具体的に記述しよう心がけること。

グループでの話し合いメモ

ステップ2 1を踏まえて、そうした「小説」も含めた「文学」は、人間にとってどのような価値をもつのか。考察してみましょう。

最初に、自分の経験を踏まえた上で「文学の価値」を考えさせる。次に作品を読解し、グループで意見交換をした後に、再び「文学の価値」を考えさせる。考えを書いて残しておくことで、自身の考えの変容が分かるようにしている。

\* 田中先生の提供資料をそのまま掲載。指導計画はP.12 図3参照

\*1 自らを俯瞰的・客観的に捉えること。

図2 美那川先生の論述課題、発問、ルーブリックと生徒の解答例

論述課題		
大航海時代は、人類にとって、「よかった」のか「悪かった」のか？		
知識を学ぶための発問		
15世紀以降、大航海時代が始まった。大航海時代により「利益を得た」人々や地域と、「不利益を被った」人々や地域について調べよ。	A	
A 文字資料（教科書、用語集など）からそのまま抜き出す B 文字資料を書き換える（歴史用語の意味を簡潔にまとめる） C 文字資料を再構成する（複数の資料から文章を取り出し、合わせていく） D 知識を基に考察して論述する E 非文字資料（地図・絵画・統計など）を読み取り、論述する		
ルーブリック		
	関心・意欲・態度	思考・判断・表現
3 発展的・深い学び	<ul style="list-style-type: none"> <li>大航海時代が、現代の世界の様子とどのように関連しているのかについて考察する。</li> <li>大航海時代について、「～だったのではないか？」のような新たな疑問を生み出し、論述する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大航海時代について、広い視野から考え論述する。</li> <li>大航海時代が人類の歴史にとってどのような意味を持つのか、具体的に歴史的事象を根拠として挙げて自分の考えを論述する。</li> </ul>
1 表面的な学び	<ul style="list-style-type: none"> <li>大航海時代で「利益を得た人」「不利益を被った人」についてまとめているだけである。</li> <li>大航海時代を現代の世界や自分自身と結びつけて考察することが表現されていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大航海時代について、一面的な部分からしか考えることができていない。</li> <li>大航海時代が人類の歴史にとってどのような意味を持つのか、自分の考えを論述しているが、歴史的事象が不正確であったり、不十分であったりするため説得力に欠ける。</li> </ul>
0	<ul style="list-style-type: none"> <li>論述しない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章の意味が不明瞭である。</li> </ul>

生徒の解答例

■利益

- 17世紀末にイギリスがアジア貿易の主導権を握るようになった。
- ヨーロッパがアジアで植民地を始めた。
- フランスがヨーロッパで高値で売れる毛皮取引を行った。
- イギリスの奴隷商人は、アフリカの支配者たちから、武器や雑貨と引き換えに黒人奴隷を買い、北アメリカ南部の経営者に売っていた。

■不利益

- 北アメリカにあるアステカ王国と南アメリカにあるインカ帝国が減ばされた。
- 征服者は国王から許可を得て、先住民に納税や労働を強制し、農場作業で酷使した。
- ヨーロッパ人が持ち込んだ天然痘、はしか、チフス、ペストなどの疫病で先住民が減少。
- 上記により、イスパニョーラ島は16世紀末に滅亡。
- アフリカから黒人奴隷として多くの人が運ばれたため、大量の人口を失い、発展に影響。

■論述

私は悪かったと考える。理由は、大航海時代に得た利益と、不利益の重さがあまりにも違いすぎたから。利益としては、イギリスがアジア貿易の主導権を握ったり、高値で売れる毛皮を得たり、黒人奴隷をアフリカからアメリカに売ったりと、お金に関する利益（一時的なもの）が多いと思った。一方、不利益は、アステカ王国やインカ帝国が減ばされたり、先住民が酷使されたり、アフリカでは奴隷により多くの人口を失った。そして、この不利益は、現代のアフリカの発展途上国の多さや、アメリカの黒人差別にも大きく影響していると思う。すべてが悪いことではないが、同等な関係ではなく、支配という形で進出したことは誤りだったのではないかと思った。

\*美那川先生の提供資料を基に編集部で作成

せませす。そして、作品を読み、その作品が文学である理由をグループで話し合い、最後に「文学の価値」を考察させます。実は、2つめの問いと最後の問いの答えを対比できるようにしています。生徒に自分が書いた2つの答えを読み比べさせると、自分の考えの変容に驚き、さらに考えを深めていきます。「考えて終わり」ではなく、書いて視覚化させて

おくことで、自己内の差異をメタ認知させ、深い学びを促しています。美那川 私も田中先生と同じように、大きな問いを最初に提示します。その問いとは、グループ学習しても答えが1つに絞れず、生徒の中にもやもや感が残り、授業後も考え続けてしまうような問いであり、その問いを考えるために知識を学ぶというのが授業の流れです(図2)。

例えば、「大航海時代はよい時代なのか、悪い時代なのか、歴史家になつて判断しなさい」という大きな問いを出します。そして、その問いを考えるための知識として、大航海時代に利益を得た人と不利益を被った人を調べさせます。そういった知識を学んだ上で考察させると、「アジアから欧州やアメリカに商品が出回り、国際経済が生まれたからよい

時代」という生徒もいれば、「ヨーロッパによる植民地化が進み、搾取が起きたから悪い時代」と答える生徒もいます。同じ資料を調べても、多様な意見が出ることで、生徒は自ら深く考えるようになります。

単元目標を起点とした授業デザインが重要

森 多様な意見を出させて共有する

点で、美那川先生の問いも「差異」に出合わせることでポイントになっています。ただ、大きな問いになると、教師の想定外の答えが出てくることも多いのではないのでしょうか。

田中 あまりにも趣旨から外れる答えはこちらで軌道修正しますが、多少ずれても、結果的に考えさせたかったことを生徒が考えていけば問題は無いと思っています。理想は、思わぬ答えが出てきても、自然に軌道修正されるような力を持つ問いを立てることです。

美那川 本校の場合、想定外のことが起きる要因は2つあります。1つは教科書や資料の読み込み不足で、この場合は生徒が該当箇所気づくように声をかけます。2つめは問い



田中誠一郎

自分と他者、過去と今など、  
差異に出合い、メタ認知することで  
自ら考えを深めていく

の理解不足に起因するものですが、それは教師の発問力の結果です。あのクラスでうまくいっても、別のクラスでは反応が異なることがありますから、生徒の様子を見取って授業ごとに発問の仕方を調整しています。

森 先生方のお話を伺って、授業デザイン原則が浮き彫りになったと思います。単元や題材のまとまりにおける目標が明確に伝わる大きな問いを授業の最初に提示し、その問いを考える中で自分との「差異」をメタ認知させ、問いの答えに到達するために必要な学びを通じて、資質・能力が身につけていくということですね。私は、その差異を認知させる方法として「予習」に注目しています。単元や題材全体を予習しておく方が、翌日の授業に合わせて一部だけ予習するよりも、生徒の学びが活性化することが、研究で分かっています。予習で全体をおおまかにつか

み、授業でそれを再構成することは、知識の内化(\*2)を促し、理解度を高める傾向にあります。そのため、予習を有効に用いれば、生徒の学びはさらに深まると考えます。

### 生徒の学びや授業改善に生かせるような評価を

柏木 今後は、授業等で育む資質・能力をどのように評価していくのかについても考える必要があります。そこで、評価に関する「実践を教えてください」。

美那川 私の場合、「資料を読み、考えて、書く」授業ですから、評価規準は、「歴史用語をどれだけ覚えてるのか」ではなく、「資料を正確に読めたか」「どのように読み取って、考えたか」といったことになり。どの単元でも生徒個々に論述をさせ、それをルーブリックを用い

図3 田中先生 2年次現代文の指導計画 (抜粋)

国語科(現代文)学習指導案	
西山国立教育院高等学校 普通科 2年 組 2- HR教室 指導者 田中 誠一郎	
単元(題材)	文学は何のためにあるのか? (読書検定『精選現代文』川上弘美「水がまきり」加藤周一「文学の仕事」)
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○自分にとっての文学の価値について考察し、主体的に価値づけようとする。(関心・意欲・態度)</li> <li>○作者の意図や表現の工夫の観点から小説を味わうことを通じて、人間にとって文学がどのような価値をもつのかについて考察することができる。(読む能力)</li> <li>○語句の意味、意図を的確に理解した上で、「象徴」や「回想」、「オノマトペ」といった文学的な表現の特色をとらえることができる。(知識・理解)</li> <li>○生徒の実態</li> </ul>
指導上の立場	<ul style="list-style-type: none"> <li>○文学的な文章について、思いと裏腹な言葉や含意のある動作など、自己の生活体験(疑似体験も含む)から的確にくい心像を、単純化して理解してしまう点にやや課題があるもの、登場人物の言動を的確に理解することや心情変化を文脈に即して捉えることはできる。さらに、読書経験の多寡は顕著であり、小説を読むことへの意味づけが、「授業や試験の一環であるから」とのみという生徒も少なくない。活動に対する反応は非常に良く、授業中の態度も極めて積極的であるため、可能な限り生徒の主体的な表現を中心にしつつ、特に小説における「象徴」の意味等に気付かせることで、人間にとっての文学の価値について考察させたい。</li> <li>○題材(単元)観</li> </ul>
指導と評価の計画	<p>「水がまきり」は、プロ野球選手として挫折した青年が幼少の残る無垢な少女との交流を通して再生していく物語である。序で河原を散歩する場面が示され、登場人物の抱える問題が回想された後、展開部で状況、場面の変化が描かれ、末尾で登場人物の変容が暗示されるという展開の小説の王道の展開を踏んでおり、ストーリーも単純ではないが、読者のものを定義するものであって、目的達成のための手段ではない」と主張する評論文「文学の仕事」を併せて扱う。</p> <p>○本題材(単元)で工夫する点や手立て</p> <p>本単元では、評論文「文学の仕事」を重んじて読むことで、より重層的な「文学の価値」についての考察を促すことを意図している。さらに、思考の流れに沿って自分の意見を整理するための「シンクシート」を用いることで、自己の思考の可視化を図るとともに、他者との意見の交流を容易にし、積極的かつ深い考察に期待したい。</p> <p>主なる学習活動</p> <p>具体的な評価規準(○)と評価方法</p> <p>第一次 2時間</p> <p>第1時 文学の価値について考察するという課題への見直しをもつ。「水がまきり」を読み、前半の意図や表現の工夫についてグループで考察する。(読む能力)(各シートの記述)</p> <p>第2時 前時の考察をまとめた記述を、他のグループで相互に読み合い、考察を深める。文学の価値について考察した文章にまとめる。(知識・理解)(シンクシートの記述)</p> <p>第二次 2時間</p> <p>第1時 「文学の仕事」を読み、筆者の主張についてグループで話し合う。第2時 前次第2時の「文学の価値」について各自のまとめを繰り返す。(本時)</p>

\* 田中先生の提供資料をそのまま掲載

### 田中 授業中の生徒の様子を評価する

ことは、教師にとっては指導改善に、生徒にとっては次の学習に生かせるので、積極的に行っていますが、必ずしもそれを記録して評定に反映することは意図していません。授業中の生徒全員の様子を教師1人で記録することは、現実的に不可能だからです。評定をつけるための評価はできるだけシンプルに単元目標に照らした達成度を測るようにし、例えば生徒が書いたワークシートを基に評価します(図3)。

森 評価は、成績をつけるという側面だけでなく、生徒が次の学びに

\* 2 外にあるものを自分の認識下に取り入れること。



資質・能力は特定の教科だけで育まれるものではないからこそ、学校全体で指導や評価を分担する

森 朋子

進むための学習支援の側面もありま  
す。生徒主体の活動としているか  
らこそ、生徒の自己評価が重要で  
す。グループ学習によって知識を外  
化（\*3）しているため、振り返り  
による内化が有効なのです。与えら  
れた評価（他者評価）を振り返るだ  
けでは、「自分はこれできていな  
いから、次はこれを頑張ろう」とい  
う意欲に結びつかないこともありま  
す。また、自己評価を重ねることで、  
評価眼が鍛えられ、生涯学び続ける  
姿勢につながります。先生がつけた  
評価が自分の評価のすべてではない  
ことを、生徒自身が理解することが  
大切ではないでしょうか。

**柏木** 評価方法の理解が進んでいな  
いために、観点別評価が浸透しない  
とされています。

**森** 毎授業、学習評価の3つの観点  
のすべてを測ろうとせず、単元や題  
材のまとまりの中で、学習・指導内



他者の考えに触れ、自分を振り返る  
ことで、よりよい考えを導けた  
といった経験は社会で生きる

美那川 雄一

容と評価の場面を適切に組み立てて  
いくことが重要です。知識・技能は  
可視化しやすく、判断力や表現力は  
ルーブリックなどによって測れます  
が、思考力や主体的に学習に取り組  
む態度は、内面的なものであり、測  
るのが難しい。さらに、知識・技能  
は各教科・科目で身につくものです  
が、思考力・判断力・表現力や学び  
に向かう力は、特定の教科・科目だ  
けで育まれるものではありません。  
学校行事や部活動なども含めた様々  
な教育活動で分担をして、資質・能  
力を育み、評価するのがよいと考え  
ます。

### 大学入試が変わる今こそ 授業を見直すチャンス

**柏木** 先生方のお話から、授業づく  
りや評価においても、教科全体、学  
校全体で進めることが重要であるこ  
とが、浮き彫りになりました。

**田中** 様々な考えを持つ教師が集ま  
る学校で、指導の足並みをそろえて  
いくよりどころになるのは、大学入  
試を超えたところにある、生徒に身  
につけてほしい力でしょう。国語で  
あれば、生徒が「高校時代に勉強し  
たのは『羅生門』です」と答えるよ  
うな授業にはしたくないはずです。  
それならば、国語の授業で身につけ  
させたい力を明確にし、その力が身  
についたのかを測りながら授業改善  
を図っていく。その力を育むために  
アクティブ・ラーニング（以下、A  
L）が有効だと思うならば取り入れ  
ていくという考えで、授業づくりを

進めていけばよいのではないでしょ  
うか。

**美那川** 私は、前任校で研修主任を  
務め、1年間をかけてALの浸透を  
図りました。1日のうち1教科の1  
時間だけALで、残り5時間が講義  
型の授業では、生徒の力は伸ばしき  
れず、一方で各教科でできることも  
異なります。高校3年間で育てる生  
徒像を明確にし、各教科や学校行事、  
部活動などが相互補完的な役割を果  
たし、学校の教育活動全体で生徒を  
育てていく。大学入試が資質・能力  
を測るものになろうとしている今こ  
そ、指導を見直し、自校の特色を打  
ち出すチャンスだと思います。

**森** 今後、大学入試改革が進むこと  
で、各大学は自学の求める学生像に  
応じた入試を行うようになるでしょ  
う。そうなれば、生徒が自分のよさ  
を生かせる入試形態を選べるように  
なり、高校でも生徒に身につけさせ  
たい資質・能力に独自性を打ち出し  
やすくなります。今、大学が学生に  
求めているのは、多様な学力です。  
自校の学校教育デザインを基に、生  
徒に多様な資質・能力を育んでいく  
授業づくりを進めていただければと  
思います。

\* 3 習得した知識・技能を活用して問題解決を試みること。

# 学校教育目標「8つの力」を育成する 授業と評価のあり方を探る

山梨県立吉田高校では、今年度から学校教育目標として8つの力（吉高GP）の育成を掲げ、教育活動計画への反映など、生徒の資質・能力の向上に向けた指導改善を進めている。今号では、吉高GP育成の実践の場である授業のあり方を「主体的・対話的で深い学び」の視点で考え、それに基づいて実際に3つの教科が授業を実践した。吉高GPとのかかわりも踏まえた3つの観点での評価とともに、その実践の内容を見ていく。

## 目標設定から計画策定、 そして授業実践へ

山梨県立吉田高校では、高保裕樹<sup>たかほゆうき</sup>校長が赴任した2017年4月から、高校3年間を通して生徒が身につける力を学校教育目標「吉田高校グラデュエーション・ポリシー（吉高GP）」として、8つの力という形で明確化した（図1）。そして、各教育活動において8つの力のうちの特にどの力を育成するのか、すなわち、8つの力と各教育活動とのつながりを明確化した教育活動計画の策定に取り組んだ。以上の取り組み

は、それぞれ本誌6月号・8月号の特集において取り上げている。

今号はその集大成として、実際の教育活動で吉高GPをどのように育み、評価していけばよいのかを授業実践を通して考えていく。今回、授業を実践したのは英語・家庭科・数学の3教科。担当教師は吉高GPを踏まえて、指導内容、主な発問計画、評価の観点と評価方法などの学習指導計画を立てた上で授業に臨んだ。焦点は、①生徒・教師がどのように吉高GPを学習・教育活動の中に落とし込んでいるのか、②吉高GPがあることで学習や指導がどのように

変わっていくのか、③授業によって生徒にどのような変化が生じ、それを次の授業や指導計画の改善にどう生かしていくのかの3点である。

取材当日は3教科の授業の実践後、授業を担当した教師3人、授業を参観した教師5人、さらに実際に授業を受けた生徒が集まり、今回の授業について振り返った。生徒の感想を中心に、授業を通じた気づきや変化、成長、今後の課題などを共有し、最後に教師たちが今回の取り組みの感想や今後の展望を述べた。それでは、次ページより各授業の実践内容を具体的に見ていく。

図1 「吉田高校グラデュエーション・ポリシー」(吉高GP)

- |         |                              |
|---------|------------------------------|
| ① 自己肯定力 | 達成感を積み重ねることで、自信をつけます         |
| ② 傾聴力   | 他者の意見を謙虚に聴く習慣を身につけます         |
| ③ 分析力   | 事実を客観的に分析する習慣を身につけます         |
| ④ 思考力   | 物事を鵜呑みにせず、「何故か」を考える習慣を身につけます |
| ⑤ 発信力   | 自分の考えを、わかりやすく他者に伝える方法を身につけます |
| ⑥ 想像力   | 未来（結果）を考え、想像する力を身につけます       |
| ⑦ 創造力   | 課題を解決する方法を創造する力を身につけます       |
| ⑧ 行動力   | 自身の考えに基づき、行動する力を身につけます       |

\*学校資料を基に編集部で作成



山梨県立吉田高校  
小林美樹 ことばやし・みき  
教職歴17年。同校に赴任して9年目。英語科。

小林美樹先生が担当する英語表現Ⅰでは、「パラグラフ」の単元のまとめとして「Logical Thinking トレーニング」と題した授業が行われた。前回までの授業でパラグラフの基本や内容のアウトライン化について学び、3度の演習を経て臨むのが今回の授業である。

生徒は、夏季休業中に実施された課外講座「論理的な文章を書くためのヒント」で、テーマに沿った一貫性のある文章を書くためのパラグラフの骨組みを学んだ。今回の授業の前半はその復習、後半は論理的な文章を書くための「Logical Thinking トレーニング」と題した授業が行われた。

## ハンバーガーの法則で 論理の矛盾を指摘

CASE 1  
**英語**  
英語表現Ⅰ

# 自己を対象化させてメタ認知を促し、 論理的思考力・表現力を養う

「これからの社会でリーダーとして活躍するためには、自分の考えや意見を論理的に、説得力のある理由とともに伝える力が必要です。論理的な思考力や表現力は、小論文や

レーニングという構成で進められた。今回の授業で育みたい吉高GPは学習評価の3観点に沿って、図2内の「吉高GPとのかかわり」の通りとした。

図2 英語・英語表現Ⅰ 指導計画(抜粋)

- 単元名 パラグラフ/論理的な文章を書くためのヒント
- 育成する能力 英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を伸ばす。また、Logical Thinkingを日本語による小論文や日頃の学習、ディベート、プレゼンテーション等日常生活のあらゆる場面の自己表現に生かせるよう習慣化させるための一助とする。

### 単元の評価規準

観点	評価規準	吉高GPとのかかわり
知識・技能	・パラグラフについて理解し、その基本となる「型(=構成)」を身につけている。	傾聴力・分析力
思考・判断・表現	・与えられたトピックについて、賛否両方の立場から、社会の動きや様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断して、理由づけをし、順序立てて適切に表現している。	思考力・発信力・想像力
主体的に学習に取り組む態度	・内容のアウトライン化、Logical Thinkingをやるにあたり、①グループで積極的に意見交換をし、より説得力のある理由づけをしようとしている。また、②これまでに学習した文法・語法を用いた表現を積極的に使用している。その際に③不明確な点や未知の語については率先して辞書・参考書を参照するなど、自ら行動し、よりよいパラグラフを書くようとしている。	自己肯定力・創造力・行動力

### 単元の指導計画

時数	指導内容	評価の観点と評価方法	主な発問計画
7時間中の6時間目	Logical Thinking トレーニング ・3回の演習を経て、より説得力があり、論理的な内容にレベルアップさせるためにはどういう考え方が必要か、分析させる。	傾聴力・分析力 →観察 ・ワークシート紙面・発表 思考力・発信力・想像力 →観察 ・ワークシート紙面・発表 ・生徒との対話 ・グループワークへの参加状況など 自己肯定力・創造力・行動力 →観察 ・生徒との対話 ・グループワークへの参加状況など	①それぞれの例題について、なぜ論理性に欠いてしまったと思うか。 Key word So what? / Why so? / True? ②どう修正すれば論理性が高まるか。

\*学校資料を基に編集部で作成

グループで協力してセンテンスを正しい順番に並べ、論理的な文章を作る。いろいろな意見を分析する力も求められる。

「これからの社会でリーダーとして活躍するためには、自分の考えや意見を論理的に、説得力のある理由とともに伝える力が必要です。論理的な思考力や表現力は、小論文や

ディベートなどの活動だけでなく、日常生活や社会でも必要となる力ですので、英語の授業がその習得の一助となればと考えています」と小林先生は語る。

授業は4、5人のグループになって開始。まず、1つの英語の文章をセンテンスごとに紙片に書き分けたものを取めた封筒が各グループに配られた。紙片の文の内容やディスコースマーカー(センテンス間の論理的関係を示す接続詞や副詞など)

などから、センテンスを正しい順番に並び替えていく。主題と結論の間に本論を置くというハンバーガーの法則を踏まえて並べ替えることが前提だ。「なぜ、その順番になるのか、きちんと理由を言えるように」「最初に何を置くか考えて」。矢継ぎ早に先生の指示が飛ぶ。

2つめの封筒も同じ方法でセンテンスを入れ替える課題である。ただし、今度は、1つだけ不要なセンテンスが混在している。不要な要素が加わり、生徒たちの集中はさらに高まり、小林先生が解説を始めようとしてもなかなか議論が終わらないほどだった。不要なセンテンスが判明し、「なぜ、これが不要なの？」と

自分自身やグループの仲間に「True？」などと「つつこみ」を入れる中で、論理的な思考には批判的・分析的な視点が必要であることを実感していく。

小林先生が問いかけると、「主題に対する理由になっていないから」と生徒が答える。「不要なセンテンスを探す問題は、センター試験にも出るので押さえておきましょう」という小林先生のアドバイスに、生徒たちは真剣にうなずく。

## 自ら「つつこみ」を入れて論理性を自問する

続いて行われたのが、本時の主題の Logical Thinking トレーニングだ。「理由づけが的確な文章が書けるようになるために、論理的に考える力を身につけましょう」と小林先生は初めにねらいを伝えた。

課題は、論理にミスがある英文を読み、その誤りを指摘して、論理の通った文章を英語で書くことだ。論理的思考力を養うことが目的のため、誤りの内容については英語で説明する必要はない。まず個人で考え、その後、グループで考える。グループで討論する際、「So what? (だから何?)」「Why so? (なぜ、そう言えるの?)」「True? (それ、本当?)」といったキーワードを使って、自分や相手に「つつこみ」を入れながら

思考や議論を深める。他者のみならず自分をも対象化することで、生徒は自らの中の小さな違和感も見逃すことなく、論理的な文章を作っていくことができる。

「主題と結論がずれている」「具体例が入っていない」などと議論を重ねながら、次々と例題を解いていく生徒たち。中には、「そもそも society (社会) と environment (環境)

の違いって何だろう」と、議論の前提となる言葉の定義にまで立ち戻って考え始めるグループもあった。

3つめの例題に取り組んだ後、課題のライティングについての説明があつて授業は終了。課題は「24時間営業は必要か」というトピックについて80〜100語で自分の考えを述べるといふもの。それを基に生徒の成長と授業の達成度を評価する。

## 授業後の振り返り

**小林先生** ほとんどの生徒が思考している様子は見て取れたので、思考力と分析力は高められたと思います。ただ、それが言葉として出てこない場面が多かった点で、発信力に課題があると感じました。これまでまとまった英文を書く際、「抽象から具体へ、具体から詳細へ」といったことを強調して言い続けてきたこともあって、生徒の口から「具体例がない」といった言葉を引き出したのはよかったです。今後は論理的に話すためのスピーキングにも力を入れていくつもりです。

**小池今日佳さん** 私は論理的な文章を書くのが苦手でしたが、今日の授業は、どうしたら相手を納得させる文章が書けるようになるのかを考えるよいきっかけになりました。英文を読む際に「So what?」などと「つつこみ」を入れるという考え方を参考に、本当にこの文章でよいのか、論理的におかしいところはないか、自分自身に問いかけながら客観的に考えることができました。これから英文を書いたり読んだりする際の視点も変わってくると思っています。

さくらがわやすひる  
**櫻川裕大さん** 今回感じたのは、吉高GPの8つの力は相互に機能しているということです。分析力が欠けていると思考力や傾聴力が働かず、傾聴力が欠けていれば自分の考え以上の発展が望めませんから、8つの力を連動させていく必要性を感じました。今日の授業では後半の課題に特に刺激を受けました。質問と答えのずれや論理の一貫性の欠如などを指摘できる論理的な思考力は、社会に出てからも求められる力ということなので、しっかりと身につけたいです。



山梨県立吉田高校  
津島真奈美 つしままなみ  
教職歴7年。同校に赴任して  
4年目。家庭科。

津島真奈美先生が担当する家庭基礎では、単元「被服管理と着装」の「衣服の手入れ」をテーマに授業が行われた。今回の授業の目的は、洗剤の成分表示について知ること、主要成分である界面活性剤の性質を理解することの2つ。「界面活性剤については、既に中学校で習っていますが、教科書に載っている図でしかイメージできていない生徒がほとんどです。自分で洗剤を買ったことがない生徒も多く、日常生活とのつながりという点でも理解はあやふやです。どのように汚れが落ちていくのかを実際に観察することで、体験的

CASE 2  
家庭科  
家庭基礎

実験の予想と結果、他者の考えとの比較から、分析力を高める

実験結果を予想させ興味・関心を高める

「洗剤の表示を知る」「界面活性に理解させたいと考えました」と津島先生は語る。  
授業はワークシートの本時の目的部分にマーカーを塗るところから開始。「洗剤の表示を知る」「界面活性

剤とは？」の2項目について、説明できる言葉には青、説明はできないが知っている言葉には黄、知らない言葉には赤のマーカーで塗る。授業後、すべてを青にするのが目標だ。

図3 家庭科・家庭基礎 指導計画(抜粋)

- 単元名  
被服管理と着装
- 育成する能力  
被服管理に必要な被服材料、被服構成などの基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、目的に応じた着装を工夫し、健康で快適な衣生活を営むことができる。
- 単元の評価規準

観点	評価規準	吉高GPとのかかわり
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>衣生活の科学と文化に関心を持ち、意欲を持って学習活動に取り組んでいる。</li> <li>着装、被服材料、被服の構成、被服製作、被服管理などについて科学的に理解し、安全と環境に配慮した衣生活を営むために必要な知識を身につけている。</li> </ul>	傾聴力・分析力・思考力
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>安全や環境と衣生活との関係について考え、まとめたり、発表したりしている。</li> </ul>	思考力・発信力・想像力
主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的に衣生活を営むために必要な被服製作、被服整理などの技術を身につけている。</li> </ul>	自己肯定力・思考力・発信力・想像力・創造力・行動力

時数	指導内容	評価の観点と評価方法	主な発問計画
5時間中の3時間目	衣生活の管理 <ul style="list-style-type: none"> <li>衣生活をつくる</li> <li>衣服の手入れ</li> </ul>	分析力・思考力・発信力 ・衣類の選択・購入・表示の確認、洗濯の方法を知る。 傾聴力・思考力 ・洗剤の働きを知る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>衣類の選択・購入・表示の確認、洗濯の方法を知る。</li> <li>洗剤の働きを知る。</li> <li>実験を通し、界面活性剤の性質を知る。</li> </ul>

\*学校資料を基に編集部で作成

界面活性剤の働きで汚れがついた布はどのように変化するか、予想をした上で、実験で確かめる。

そして、生徒たちは実際に洗剤のパッケージを見て、どこに着目して購入するかを考えた。「効果」「量」「値段」「ブランド」などを挙げる生徒が多く、「成分」に着目する者はほとんどいない。先生は生徒の考えをいくつか紹介した上で、「成分といるところに、界面活性剤と書いてあるね。今からこの働きを学びます」と日常生活と授業の内容をつなぐ。  
次に、界面活性剤によって、どのように汚れが落ちていくかを生徒

個々でイメージし、変化の段階ごとに図を描く。「間違いを恐れず、自由に考えて」と津島先生は生徒に声をかける。自分の予想と実験結果の差異に合わせることで、理解を深めてもらおうという工夫である。

## 生徒一人ひとりが現象の命名者

テーマへの興味・関心を高めたら、いよいよ実験である。食用油で汚した2枚のガーゼを水の入った2つのカップにそれぞれ入れ、片方に洗剤を入れて静かに観察する。やがてガーゼから汚れが丸く浮き出てくるのを見て、あちこちから声が上がります。次に、洗濯機をイメージしながら、洗剤を入れたカップをマドラーでかき回し、汚れがついたガーゼがどうなるかを確認。その後、実際にどのように汚れが落ちたのかを図に描いた上で、汚れが落ちていく変化の各段階に、自分なりの名称をつけようと先生が指示した。意外な授業展開に生徒たちが笑顔を見せる。教科書には「浸透↓乳化・分散↓再付着防止」と、変化の各段階に現象名が記されているが、自分で命名し、

他者と比較することで想像力を刺激し、現象に対する理解を深めてもらうという、これも津島先生の工夫だ。続いて、生徒の何人かに実際に汚れが落ちていく様子を口頭で説明させ、生徒の命名をいくつか紹介する。「Wコーティング」「集合体ぶつぶつ」などユニークな名前が登場し、教室内で笑いが起こる。

次に、ワークシートの内容を隣同士で共有する。「本校の生徒は考える力があるからこそ、1人で考えることにこだわりすぎる傾向があります。周り柔軟にコミュニケーションを取ることで、他者の考えとの違いから自分の考えを広げたり、深めたりする姿勢も身につけてほしいと

実験で見て取れた変化の各段階に名前をつける。同じ実験を観察しても着目する点が違えば、ネーミングも変わってくる。

## 授業後の振り返り

**津島先生** 今日の授業では分析力の向上を特に意識しました。ワークシートを見る限り、自分の予想と実験結果の違いを認識することを通じて、図式化する力がついたと思います。その一方、自分が獲得した知識を表現し伝える力をもう少しつけさせたかったです。身近で起こっている現象であることを理解し、日常生活に生かせることを期待しています。発問では答えを言わないことに一番気をつけました。答えは1つではないということも伝えられたと思います。

**小川<sup>ひかり</sup>光さん** 授業では傾聴力や分析力が高まりました。先生の発問を聞きながら、やるべきことを考え、自分なりの考えを導き出せました。自分の予想や仮説を先生に認めてもらえたことが自信になり、自己肯定力の向上にもつながりました。現象に名前をつけることを通して、やみくもに教科書の内容を覚えるのではなく、自分なりに理解することも大切だと感じました。ただ、理解したことを人に伝える力は十分ではないので、今後は発信力も伸ばしていきたいです。

**関<sup>ひかり</sup>勇樹さん** 汚れがどのように落ちるのかを自分で予想し、結果を分析することで、想像力や分析力が高まったと感じています。自分の考えと実験結果の相違や、汚れが落ちるメカニズムを理解することができて、自己肯定力も高まりました。自分で現象を命名するという活動を通して、授業の内容がより印象に残りました。また、化学との接点も知ることができて、知識の定着という面でも得るところが大きかったと思います。

思います」と津島先生は述べる。一通り実験が終わると、津島先生は教室のホワイトボードに図を描きながら、界面活性剤が汚れを落とすメカニズムを説明する。実際に目で見て、イメージを描き、名前までつけた現象だけに、生徒たちは興味深く説明を聞いていた。そして、先生は「今日学んだことは『化学基礎』でも勉強するんだよ」

と告げ、持参させていた「化学基礎」の教科書を開かせた。にわかには教室内がざわつくが、それは教科はそれぞれ独立したのではなく、いろいろなところでつながっているということを生徒が実感したからだ。最後に隣同士で今日学んだことを説明し合い、ワークシートに「一番大事だと思った部分」「新しい発見」「感想」を記入して授業は終了した。



山梨県立吉田高校  
佐野未知也 さんのみちや  
教職歴7年。同校に赴任して  
2年目。数学科。

**美術館の絵が一番見やすくなる角度は？**

佐野未知也先生が担当する数学Ⅱでは、三角関数の「加法定理」の単元末にあたる「加法定理の応用」の授業が行われた。冒頭、モニターに、上向き加減に壁を眺めている男の子の絵が映し出される。「今日は美術館でどこから絵を見ると一番見やすいのかについて考えてみよう」と佐野先生。高度な問題を少しでも身近な題材で提示することで、生徒の興味を引きつけ、学びの有用性を実感させようとする佐野先生の工夫だ。

問題は次の通り。「目の前の壁に絵が飾ってある。絵は目の高さから1m高い位置にあり、縦の長さが2

CASE 3  
**数学**  
数学Ⅱ

**多様な解法を他者とともに探究させ、  
学びの有用性を実感させる**

mである。男の子が前後に動く時、どの場所から見ると絵が一番見やすいか。「見やすさ」の定義は、絵の上下各1点と男の子の目の1点を結んだ三角形の、男の子側の内角が最

大になる時の壁からの距離とした。三角関数の加法定理の問題だが、正弦定理や余弦定理、ベクトルを用いてもアプローチできる難問だ。続いて、本時の行動目標として「考

える、質問する、説明する、チームで協力する」の4点が示され、グループ活動が始まった。生徒たちは小さなホワイトボードに図を描いたり、ノートに計算式を書き連ねたりしながら頭をひねるが、解答の方針を立てるのに苦労していた。

10分ほどで佐野先生が第1のヒントを出す。モニターに、先ほどのイラストから三角形だけを取り出した図が映し出された。求める角は $\theta$ 、男の子から壁までの距離はxで表さ

図4 数学・数学Ⅱ 指導計画(抜粋)

観点	評価規準	吉高GPとのかかわり
知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>加法定理の証明を理解し、加法定理を用いて、2倍角の公式・半角の公式・和積の公式を導くことができる。また、公式の基本的な使い方を理解している。</li> </ul>	傾聴力・分析力
思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題の条件を把握、整理し、必要に応じて加法定理・2倍角の公式・半角の公式・和積の公式を活用することができる。また、公式を使用する際、なぜその公式を使用するのか説明することができる。</li> </ul>	思考力・発信力・想像力
主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題やグループワークに意欲的に取り組んでいる。また、新しい課題に対して、既習事項を基に考察し、積極的に解決しようとしている。</li> </ul>	自己肯定力・創造力・行動力

時数	指導内容	評価の観点と評価方法	主な発問計画
9時間中の9時間目	加法定理の応用(見込む角の最大最小)	分析力・思考力・想像力 ・観察、確認テスト、リフレクションシート 自己肯定力・創造力・行動力 ・グループワークへの参加状況 ・リフレクションシート	①見込む角を求めるためにはどうすればよいか。 ②1つの解法だけではなく、ほかの解法はないか。 ③ $\sin \theta$ 、 $\cos \theta$ 、 $\tan \theta$ の値が大きくなると $\theta$ は大きくなるのか。

\*学校資料を基に編集部で作成

前の時間に「次は難しい問題に挑戦するよ」と伝えていた佐野先生。難問に興味を持って臨めるように身近な題材を取り入れた。



れている。「今日はかなり難しい問題でしたので、一つひとつのヒントを早めに出すように心がけました」と佐野先生は振り返る。

第1のヒントにより、停滞気味だった議論が活気づく。あるグループでは、1人の生徒が2つの三角形を描き並べ、「 $\theta$ を別の形で表さないと解けないよね」「この $a$ から $\beta$ を引いた角が $\theta$ だから……」と解答の糸口を示し、ほかのメンバーと協働して問題を考え始めた。思考力や分析力、行動力など様々な力が発揮されていく。

## 別解の解説に興奮し 歓声を上げる生徒たち

この間、佐野先生は各グループを巡回しながら、生徒の議論を静かに見守る。時に質問に応じることもあるが、個別のアドバイスはほとんど発しない。さらに10分ほど経った頃、先生が第2のヒントを出した。

モニターに映し出されたのは、例の三角形を座標軸の上に重ねたグラフである。「いくつかのグループがグラフを使って解く方針を立てていたので、クラス全体で理解をそろえ

るため、このタイミングで出しました。また、ベクトルを使って解く別解への広がりも期待して、グラフに注目させるといふねらいもありました」と佐野先生は明かす。「グラフに三角形を乗せたら何が見えてくる?」「タンジェントの値と角度の関係はどう見る?」。簡潔な問いかけが矢継ぎ早に先生の口から放たれ、それを糸口に生徒の話し合いはさらに展開する。立ち歩いてほかのグループの様子に行く者も出始めたが、もちろん、それは佐野先生の授業ではよく見られる光景だ。

不完全な解答をグループのメンバーが持ち寄り、お互いの視点を生かしてそれぞれが正解に近づいていく。まさにグループワークを行う醍醐味だ。

## 授業後の振り返り

**佐野先生** 今回の問題は、入試レベルの難度であったため、今まで学んだ内容をどの程度使えるかが鍵でした。40人が最後まで粘り強く取り組み、目標とした吉高G.Pの力を向上させることができたと思います。反省点は時間が足りなかったこと。ゆっくり考えさせる時間をもっと取りたかったです。授業の中で知識を理解する時間と、応用的な問題をじっくり考える時間をバランスよくつくり、知識を定着させることが大切だと思います。

**渡邊慧<sup>あいた</sup>さん** グループで話し合いを始めた当初、メンバーそれぞれで作った解答は、僕の解答も含めてどれも正解に至るのではなく、5、6割の完成度のものばかりでした。そこで、お互いの解答を見せ合いながら、それぞれの解法の根拠や問題点を確認していきました。すると、その過程で、自分の解答を修正することができたのです。そのように、仲間とお互いのよさを生かして取り組む中で、分析力が向上したと思います。グループで協力しながら、誰が一番早く解けるかを競い合っている部分もあり、刺激的で楽しい授業でした。

**地主羽<sup>じぬしほな</sup>奈花<sup>なな</sup>さん** 私は数学が苦手なので、普段は教えてもらうことが多いのですが、今日は難問だったので、みんなで協力し、相談しながら取り組みました。自分のちょっとした意見を仲間が拾って、次の展開に結びつけてくれることもあり、発信力と自己肯定力が高まったように感じます。議論が出尽くして諦めかけた時もありましたが、タイミングよく先生がヒントを出してくれたので、議論が再び活性化しました。

し、黒板に計算式の途中までを書いた。暗に「みんなの計算式は途中まで合っているよ」と知らせ、安心して議論に打ち込んでもらう配慮だ。

さらに議論が続き、最後の約5分で先生が解説。加法定理を使った解説、及び別解の解説が行われ、最後に正弦定理を使う解法の解説で先生が図を描いて「 $x$ はどうやって求める?」と問いかけた。即座に複数

の生徒が口をそろえて「方べきの定理!」と答えると、「おお!」と教室に歓声と拍手が巻き起こった。今回の問題を考え抜いたからこそアプローチの違いに強い関心を寄せ、そのようにして知った別解によってさらに思考を深めていたようだった。授業終了後も解法について熱く語り合う生徒たちの姿が、それを物語っていた。

意見  
交換会

## 教師が意図した「差異」との出合いの中で、 生徒はさらに丁寧に、深く学習する

授業後、担当教師と生徒との振り返りが行われるとともに、見学した教師も加えた教師たちによる意見交換会が持たれた。グループワークの進め方や発話・発問の工夫によって、生徒が主体的に授業に参加している点を評価する声が多く上がった。

### 高保裕樹校長

グループワークとICTの活用という面で3人の授業は共通して

いましたが、目指す方向性に違いがあるのを感じました。英語の小林先生はすべての教科に通じる基盤づくりを目指し、生徒は今まで学んだ知識を使うことで、知識が整理されていくのを楽しんでいるように感じられました。家庭科の津島先生は日常生活や他教科との関係など横へのつながりを意識した授業で、生徒が観察したことを言葉や図で表現する活動を通して、頭をフル回転させている様子が見て取れました。数学の佐野先生は徹底的に思考を深めるスタイルで、難問にもかかわらずギブアップするグループは1つもなく、最後は拍手と歓声で終わるという素晴らしい場面を見ることができました。今回、いずれの授業でもグループ同士のディスカッションはありませんでした。グループと教師間のコミュニケーションだけでなく、グループの枠を超えた意見のぶつかり合いや共有があれば、さらなる差異の発見から、広がりや深まりが生まれたかもしれません。

### 小保義一教頭

いずれの授業も、生徒たちが達成感

を味わえた素晴らしい授業だったと思います。授業が終わった後まで、生徒が今日の学習内容について語り合う様子から、生徒の中で知識の深まりや新たな好奇心が湧いていることも感じられました。他教科の授業を見てよいところを取り入れられないか、補い合うことはできないか、教師自身が貪欲に学んでいく姿勢が一層求められると思います。

### 舟久保豊先生 (1学年主任)

クリエイティブな授業をつくるために最も大切なのは発問のタイ

ミングと内容です。特に家庭科の授業での現象に名前をつける活動は、現象の特徴が分かっていないと命名はできないので、深い理解につながる取り組みだったと思います。グループワーク等の活動は、やらなければならない思いながらもできないことがあります。



今日はすべての先生が活動を取り入れているのを見て、教科の壁を取り払って足りない部分を補い合い、総合的に生徒を育てていく可能性を感じました。

### 渡邊浩一先生 (理数科副主任)

佐野先生の数学では、ある生徒が「すべての範囲を復習して臨んだ」と言っていました。そこまでの行

動は先生自身も予想していなかったと思います。課題の与え方によって教師の期待以上の行動を引き出せることに驚かされました。英語や家庭科の授業でも、教師の発問が生徒を深い理解や、意外な気づきに導く場面がいくつも見られました。私も生徒の思考を深める授業展開や発問、教材の選定などを工夫していきます。

### 銭谷恭子先生 (1学年担任)

小林先生の英語の授業を見学しましたが、興味深かったのは、英文を並べ替える課題の中で、関係の

ないセンテンスが混ざっているという仕かけです。小林先生の発問をきっかけに、生徒の頭の使い方ががらりと変わるのを感じました。また、societyとenvironmentの違いなど、テーマへの理解を深めようと言葉の定義にこだわり始める生徒が現れたのも驚きでした。思考を深める「つつこみ」を用いて批判的に文章を読むという視点を与えたからこそ、生徒が自ら根源的な問いを持ったのだと思います。

### 山梨県立吉田高校

校訓は「百折不撓」「純剛」。新入生を対象にした校歌・応援歌指導、富士登山強歩大会などの伝統行事を持つ。「総合的な学習の時間」の中に「富士山学」を設定し、探究学習を行う。ウエイトリフティング、ラグビーなど部活動も盛ん。

◎設立 1937(昭和12)年

◎形態 全日制/普通科・理数科/共学

◎生徒数 1学年約280人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ) 国公立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、大阪大などに106人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ569人が合格。

◎URL <http://www.yoshidah.kai.ed.jp/>

●3年生文系の2クラス合同の小論文対策講座で、各グループがほかのグループの代表答案を読み、各グループ内で内容について議論し、評価する。生徒全員が、答案の評価の根拠を説明できるようにすることが目標だ。(P.25に授業デザインを掲載)

グループごとに作成したアウトラインに沿って各自が書いた小論文をグループ内で読み合う。アウトラインは同じでも語彙力や論理構築力などによってできた小論文が人と異なることを実感させることがねらい。前時の授業でグループの協働で作成したアウトラインを消化できなかった生徒に、「他者の考えを自分のものにする」ことの大切さを伝える。

# 生徒同士の協働で小論文を作成し、相互に評価させることで考え続ける姿勢を育む

## 梨子田先生のアクティブ・ラーニング

### 他者の視点を通して小論文のスキルを体得

地理歴史・公民科を担当する梨子田喬先生は、校内で小論文講座を実施している。生徒同士で答案を作成し、相互評価させる活動を通して、論の組み立て方、段落の構成力、具体例の提示の仕方など、小論文のスキルを生徒たちに体得させようとしている。



岩手県立大船渡高校

梨子田喬 なしだ・たかし

教職歴15年。同校に赴任して4年目。進路指導課。地理歴史・公民科担当。アクティブ・ラーニングの実践は7年目になる。

### 岩手県立大船渡高校

◎1920(大正9)年創立の岩手県気仙農学校が前身。「自主独立」の気概を持ち、文武一道に取り組む学校を目指す。インターハイ出場の弓道部や空手道部など、部活動も盛ん。

◎設立 1949(昭和24)年

◎形態 全日制・定時制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ)

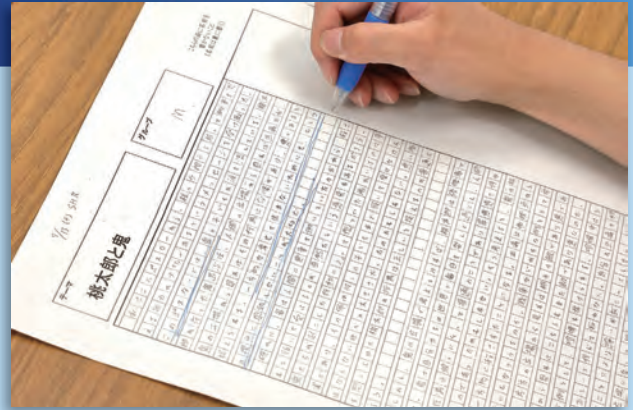
国公立大は、帯広畜産大、岩手大、東北大、山形大、東京藝術大、新潟大、金沢大、釧路公立大、岩手県立大などに86人が合格。私立大は、北海道医療大、岩手医科大、東北学院大、慶應義塾大、津田塾大、東京理科大、明治大などに延べ182人が合格。

◎URL

<http://www2.iwate-ed.jp/ofu-h/>



梨子田先生は、生徒の議論に耳を傾けながら、注意すべき事柄を板書していく。その中で、特に気になる部分については、全体に向けて解説する。今回の授業では、文章の構成について評価の指針がないまま議論している生徒が多かったため、筋が通った論理構成になっているかを確認するよう、アドバイスした。



まず、梨子田先生が評価のポイントを説明。その後、各グループでほかのグループの代表答案を回し読みし、各自が気づいたことを原稿にメモ書きする。議論になりそうな部分にマーカーを引く。一通り読み終えたら、各グループの司会を中心に、論理構成や内容的確さ、具体例の適切さなどについて、根拠を述べながら議論する。

2回目の授業でも、冒頭5分間でグループで互いの答案を見せ合う。「同じアウトラインに基づいて書いたのに、なぜ異なる答案になるのか」という疑問を持たせることで、アウトラインの設計不足、論理構成・文章力の巧拙など、グループや個人の課題に気づかせるためだ。

続いて、ほかのグループの代表答案を読ませて評価させる。目標は、「グループの全員が、評価の根拠を説明できる」ことだ。

評価の観点は、教材に応じて変わる。今回は、①問いの的確か、②具体例、③構成の3つの大項目を設定し、その観点に沿った小評価項目は、生徒たちに決めさせた。そのねらいは、「なんとなく構成がよい」ではなく、「構成がよいとは、

「納得できない」という生徒が一番多く、このことを学んでいる

今回の授業の教材は、佐賀大学文化教育学部の入試問題（2015）だ。桃太郎に父親を殺された小鬼が泣いているイラストにキャッチコピーが添えられた新聞広告からどのようなメッセージを受け取ったのか、実社会に関連づけながら論じなさいという設問だ。

指導の流れは、次の通り。まず生徒は宿題として独力で答案を作成し、1回目の授業ではその答案を4人のグループで読み合い、メンバーで協働して、答案の再作成に向けたアウトラインを考える。そして、宿題として、そのアウトラインに基づいた答案を再び独力で作成する。

「AIについて学ばせたい」「環境問題について考えさせたい」と出題分野の観点でテーマを選ぶことが多いと思いますが、私は、生徒が語りたいか、語り合いを通してどのような力を身につけさせることができるのかを重視しています」

今回の教材は、「広告のメッセージを正しく受け止められるか」「身近で具体的な例を挙げられるか」など、問いを把握する力、問いの的確に答える力を養うことを重視した。冒

教師による介入も授業のポイントになる。冒

思考の活性化・深化への配慮

「納得できない」という生徒が、実は一番学んでいるのです」

口頭による介入は必要最低限、板書で伝え、必要な生徒に拾わせる

小論文の指導で、梨子田先生が何よりも大切にしているのは、教材選びだ。

「自分と同じ生徒目線の評価だからこそ、疑問を抱き、文章の何がよくなかったのか、人に伝わる文章を書くにはどうすればよかったのかを、深く考えるようになります。『納得できない』という生徒が、実は一番学んでいるのです」

「自分と同じ生徒目線の評価だからこそ、疑問を抱き、文章の何がよくなかったのか、人に伝わる文章を書くにはどうすればよかったのかを、深く考えるようになります。『納得できない』という生徒が、実は一番学んでいるのです」



各グループの半分のメンバーが隣のグループのメンバーと入れ替わり、自分たちがつけた評価の根拠について説明した。その後、自分のグループに戻って今日の議論について振り返り、ほかのグループの評価との違い、各自の感想などを共有した。最後に、個人で沈黙思考して振り返りを行い、「答案評価シート」に感想を記して提出した。



「答案評価シート」を使って、ほかのグループの代表答案に点数をつける。その点数を黒板に書き出し、得点の高かった3グループの代表答案作成者に拍手を送る。

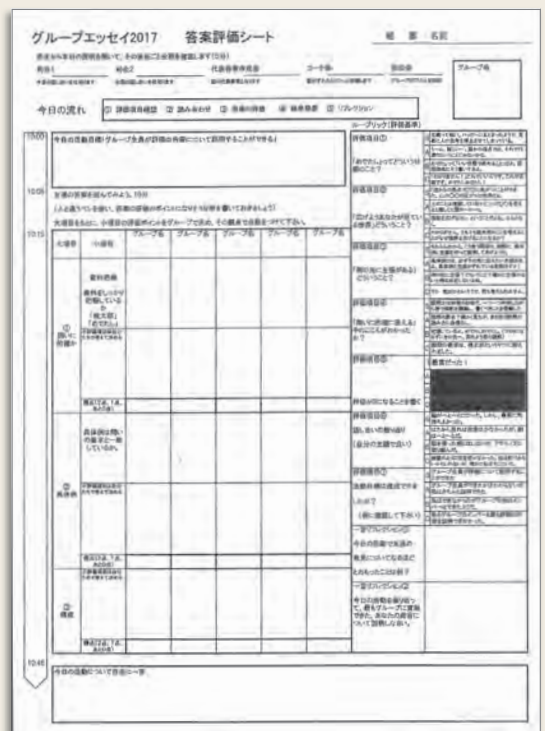


グループ討議を通して、人の意見を聞き、自分とは違う価値観があることを知り、刺激を受けたのと同時に、他者の視点を盛り込む難しさを感じました。

頭の解説は短く、議論中の介入も1、2回にとどめる。机間巡視をしながら生徒の議論に耳を傾け、設問を踏まえているか、方向性がずれていないかを確認し、全体で共有すべきことが出てきたら、黒板に大きくメモ書きして注意を促す。「生徒が自ら気づき、修正することが重要です。教師が指示をしすぎると、その都度議論が中断されるばかりか、生徒にとってやらされる活動になってしまいます」

板書で不十分であれば、最も大切な事項だけ口頭で説明する。それでもできるだけ手短かにし、かつ議論の半ばまでに済ませておく。学びが深まる終盤の時間帯に、生徒の邪魔をしないためだ。今回は、構成をどう評価すればよいかで苦戦しているグループが目立ったため、「各段落の主張を要約し、文章の筋が通っているかを確か

■答案評価シート



左側にほかの5グループの評価を記入。右側には梨子田先生が設定したルーブリック(評価基準)を掲載しており、代表答案を評価する際の参考にさせる。

めてほしい」とアドバイスした。

**場づくりへの配慮**

**役割を固定化させないことで社会で必要な協働性を育む**

深い学びを生み出す議論にするには、生徒がアクティブ・ラーニングの意義を十分理解していることが重要である。そのため、授業前に「一人ひとりが学びのプレーヤーである」「目標は脳がへとへと」「『親密圏』での馴れ合いの議論ではなく、『公共圏』における他者との対話が自分を高める」といった議論の心構えを伝える。

さらに、グループ内で司会2人、代表答案作成者、議論のずれを指摘する係、プリントの回収係を分担し、その決め方は生徒に任せている。

## 授業デザインシート

【教科・科目】小論文

【設定時数】2時間中の2時間目

【テーマ・作品】「桃太郎と鬼」(佐賀大学文化教育学部国際文化課程の2015年度入試問題)

【本時全体の目標】生徒全員が、それぞれの答案における評価の根拠を説明できる。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
【前回の振り返り】グループメンバーの答案を交換して読む	メンバーの答案を交換して読み、「同じアウトライン」なのに「答案が違う」ことに気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> <li>判断力</li> <li>表現力</li> <li>主体性</li> <li>多様性</li> <li>協働性</li> </ul>	宿題として個人で書いた答案をグループで読み合わせる。前回作ったアウトラインを自分のものにできたか確認させる。	「『同じアウトライン』なのに『答案が違う』のはなぜだろう？」 「アウトラインが書きにくかったのはなぜだろう？」	前回の授業を欠席した生徒が、スムーズに授業に参加できているか、机間巡視しながら声をかける。
【ガイダンス】本時の目標相互評価させる際の観点、留意事項	<b>【本時の目標】</b> 「全員が評価の根拠を説明できる」 <b>【相互評価の観点】</b> ①問い手的確か：資料の理解は十分か、広告コピーの内容をきちんと踏まえているか。 ②具体例：広告のメッセージに対して適切な具体例か。広告のメッセージとの共通点を説明できるか。 ③構成：主張が明確に伝わる構成になっているか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識</li> <li>技能</li> </ul>	本時の目標と評価の際の3つの観点を提示。この観点が、授業を通して身につけさせたい力であり、それを説明できるようになることを目標としている。講義や添削で「こういう風に答案を書きなさい」と伝えても、生徒はなかなか書くことができない。評価の観点に基づいて相互評価させることで習熟することを目指す。	答案を書いた生徒の気持ちに配慮すべきであること、そして答案はグループの協働の産物であり、作成した個人が責任を感じる必要はないことを再確認させる。	議論の時間を十分確保するため、ワークシートの作成には時間をかけさせない。提出を意識して丁寧に書く必要はないことを伝える。
【活動①】各グループの代表答案を読む「思考」	個人で、評価の観点を踏まえながら、ほかのグループの代表答案をしっかりと読み込む。	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能</li> <li>思考力</li> </ul>	<b>【教師】</b> ほかのグループの代表答案をグループのメンバーで交換しながら読ませる。机間巡視と板書指示。 <b>【生徒】</b> 代表答案を交換しながら読む。その際、考えたことや気づいたことをコンパクトに、答案に書かせる。	「周りの人とペンの色を変えてごらん」 「丁寧に書かないでメモ程度で」 「3つの観点を意識して読んで」	コメントを丁寧に書いている生徒に、簡単に書くように声をかける。メモ程度にとどめ、議論の中で皆に伝えるように心がけさせる。
【活動②】評価と評価項目の立案「協働」	他者の答案を評価することを通して、正確な資料把握や問い手的確に答える力、設問の要求に沿った具体例を挙げる力を育成する。また、リーダーシップを持つ生徒がすべてを判断してしまったり、馴れ合ったりするのを防ぐため、態度目標として「一人ひとりが学びのプレイヤーである」「公共圏における他者との対話」を強調する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> <li>判断力</li> <li>表現力</li> <li>主体性</li> <li>多様性</li> <li>協働性</li> </ul>	<b>【教師】</b> 介入は極力避け、生徒の議論の時間を確保する。机間巡視で生徒の議論を聞き、疑問やアドバイスを板書する。必要な時は、1回だけ口頭で一斉介入する。 <b>【生徒】</b> 評価の観点を話し合い、それを決めたら各代表答案に、3段階で点数をつける。得点の理由を説明できるように留意させる。	「役割にとらわれず、気づいた人がやってみて」と声をかけ、役割が固定化しないようにする。制限時間が迫ったら、「終わらなくてもよいので、じっくり取り組もう」と呼びかけ、議論に集中させる。	評価すること自体が目的ではなく、活動を通して学習課題が浸透することが一番のポイントとなる。机間巡視で生徒の様子を見て気になる点を拾い、板書や声かけを通して議論をコントロールする。
【まとめ振り返り】評価の結果発表と生徒の振り返り	<b>【まとめ】</b> リーグ戦形式にするなどゲーム性を盛り込むことで主体性・協働性を引き出す。 <b>【振り返り】</b> 取り組みを振り返ることで、学んだ内容の定着、活動中に感じた疑問点の整理などを行う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> <li>表現力</li> <li>主体性</li> <li>多様性</li> <li>協働性</li> </ul>	<b>【まとめ】</b> 各グループの評価点を、生徒に板書させる。合計点を計算して上位者に拍手。 <b>【振り返り】</b> 形態は、A) メンバーを変えない、B) 指示して入れ替え、C) 全員で立食パーティー形式のフリートークのいずれか。	<b>【まとめ】</b> 「このグループは問い手的確だったね」など、振り返りの時にその答案に注目するきっかけを与える。 <b>【振り返り】</b> 生徒の状況を見ながら、足りない部分に働きかけていく。	教師からの評価は伝えず、生徒にもやもやを残し、考え続けさせる。授業後に個別に質問してきた生徒には説明する。振り返りは残り時間や生徒の様子を見ながら、A～Cのいずれかを行う。

\*梨子田先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

### 成果と課題

## 評価に納得せず、考え続ける生徒たち

そうした指導の最大の成果は、「評価に納得できない。高評価を得るためにどうしたらいいのか」と考え続ける生徒が増えたことだ。また、生徒は対策講座によって小論文の基礎をしっかりと身につけるため、スムーズに入試直前の個別添削に入るようになり、教師の負担も軽減されている。

今後の課題は、生徒たちの間に対話的な学びの作法とマインドを浸透させていくこと、協働的な学びの有効性を理解させることだ。

「多くの授業が主体的・対話的となれば、相乗効果が期待できます。生徒たちだけでよりよい議論や振り返りができるよう、学校全体の取り組みに広がっていけばと期待しています」

「役割が固定化すると、活動が硬直化する恐れがあります。実社会では、自分の役割を果たすだけでなく、周りに配慮できる視野の広さや柔軟性も大切です。リーダーシップを取るのが苦手なのに司会になった生徒がいれば、周りがフォローして議論を進める、文章の作成が苦手な生徒が代表答案作成者になれば皆でアドバイスするなど、一人ひとりが『学びのプレイヤー』であることを自覚して授業に参加し、協働性を培ってほしいと思います」



前時の内容を振り返った後、三浦先生は「手で読んでいきます」と、黒板に掲示した本文にマーキングしながら読解のポイントやキーワードを解説。生徒も同様に、本文が印刷されたプリントにマークをつけながら読解を進める。「ここはどういうことか説明してみよう」と、生徒の理解度を確認する問いかけを何度も行いながら展開した。

●1年生「国語総合」の評論「ものごととは」の授業で、3分割した本文を各1時間で学習する3時間目。具体例を的確に読み取るため、全体で本文を精読した後、その内容を応用して身近なものを定義するグループワークを実施。(P.29に授業デザインを掲載)

教材の特性や育てたい力を基に  
活動の形を柔軟に検討し、  
言葉を通して思考する力を高める

国語科を担当する三浦章子先生は、単元や教材に応じて、授業の形態を変えている。例えば、「平家物語」は群読、「羅生門」は知識構成型シグソー法を取り入れ、生徒の学びを深めていく。「教材の特性や生徒に身につけさせたい力の育成に最適な活動を検討すると、おのずと形態

単元のねらいに応じた学びが  
深まるよう、活動形態を検討

三浦先生のアクティブ・ラーニング



宮崎県立高鍋高校  
三浦章子 みうら・あきこ

教職歴23年。同校に赴任して7年目。指導教諭。探究科学コース主任。国語科担当。アクティブ・ラーニングの実践は4年目になる。

宮崎県立高鍋高校

◎秋月藩校「明倫堂」の精神を引き継いで開校。「心身學道」「師弟同行」などを教育理念に掲げる。普通科には、課題研究に力を注ぐ探究科学コースを設置。全国大会常連のラグビー部など部活動も盛ん。

◎設立 1923(大正12)年

◎形態 全日制/普通科・生活文化科/共学

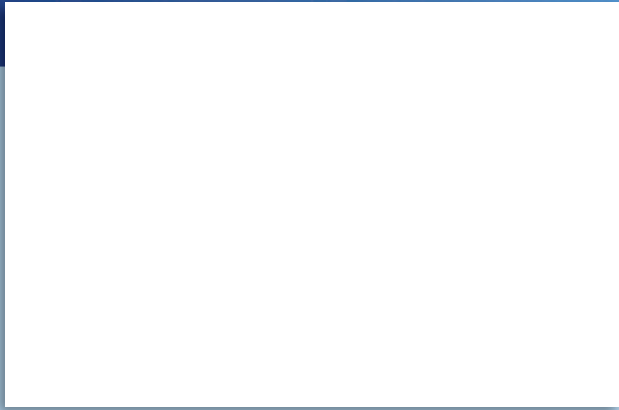
◎生徒数 1学年約260人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、千葉大、お茶の水女子大、広島大、九州大、熊本大、大分大、宮崎大、宮崎公立大などに55人が合格。私立大は、青山学院大、東京理科大、関西大、西南学院大などに延べ123人が合格。

◎URL

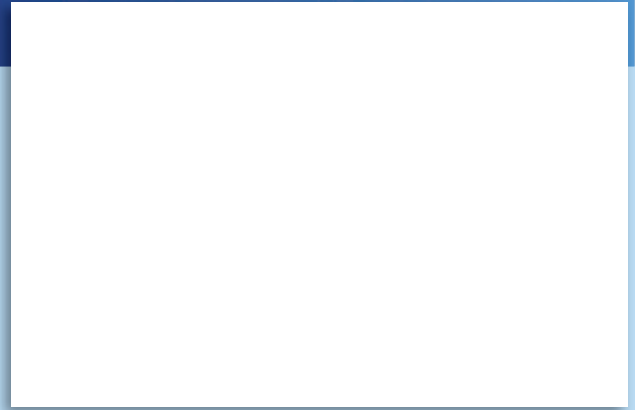
<http://takanabe-hs.ed.jp>



ホワイトボードに各グループで話し合った定義を記入し、代表者がそれを読み上げる。それを聞いて、どんなものを定義しているのかをクラス全体で考え、定義として妥当かを議論した。



うまく表せなかったり、ことば不足に気づいたりと苦労しましたが、みんなで話し合うことで1つの定義にまとめられました。



自分のマークのつけ方が読解を深めるものになっているか、生徒は隣同士でマークのつけ方をチェックする。その後、ことばによってものを定義することの意味を説明した本文の内容を実感するために、3～4人のグループになり、「辞書」「カーテン」「制服」「消しゴム」「時計」など、身近なものを1つ選び、定義を考えるグループワークを行った。

が変わってきます。共通している点は、生徒が思考の過程を共有し、考えを広げ、深めていく学びであることです」

評論「ものことば」では、「ことばがあるからこそものを認識できる」という筆者の主張を理解するため、グループごとに身近なものを1つ選んで定義する活動を行った。この活動は、生徒の課題に基づいている。

「1年生を指導する中で、『例えば……』と考えられない生徒が多いことに気づきました。恐らく、そのものの本質を理解できていないため、別の事象が思い浮かばないのでしょう。今回は、筆者の主張を身近なものにあてはめて考えさせ、本質を捉える力を育みたいと考えました」

#### 思考の活性化・深化への配慮

### 精読による内容理解が思考を広げる支えになる

本文の内容を基に学びを深めるためには、本文の十分な理解が欠かせず、精読の必要があるが、入学時には文章と向き合えない生徒が多いと、三浦先生は言う。

「『国語は勉強しなくてもできる』と捉えている生徒もいて、難しい言葉が出てくると、考えるのをやめたり、勝手に解釈したりします。そこで、『手で読む』をポイントに、本文に独自ルールのマークを記入しながら、文章から意味を絞り出す意識で読み進めていきます」

例えば、三浦先生は、接続詞や主語と述語の関係、条件節、読者に投げかけられた問いなどにマークをし、生徒は本文が印刷されたプリントに書き込みをする。その際、「縦と横をつなぐ」を意識させて、一文ごとに丁寧（縦）と同時に、文章間の関係を捉える読み（横）を並行して進めていく。

さらに、読解のポイントとなる文章について、「ものを定義するための条件は2つありましたが、それは何でしょう」などと問いかけ、考えを深めていくよう促す。

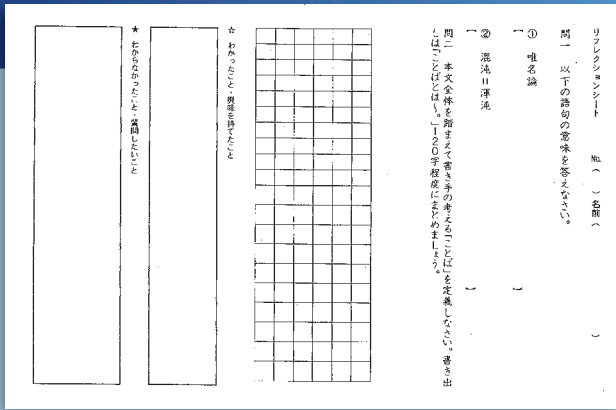
1年生の初めは三浦先生の説明についていくだけで精一杯だった生徒たちは、次第に「手で読む」術を習得し、模試や大学入試でも、問題文にマークをしながら読み進めていくという。

### 思考力を高めるために、思考の過程を何度も振り返らせる

そうした精読による正確な理解が、その後のアクティブ・ラーニングの土台となる。この日の活動でも、開始直後から話し合いは活発に進み、ほとんどのグループは10分程度で定義を書き終えた。その間、三浦先生は机間巡視しながら、「考えたことをノートに書き留めて」「消しゴムは使わないで」といった指示を出した。

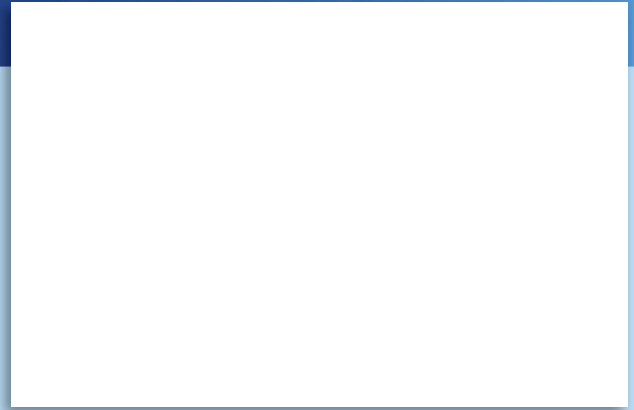
「思考力を高めるためには、思考の過程を何度も振り返る試行錯誤が欠かせません。振り返りができるよう、グループで話したことを書き留め、思考の跡を残しておくようにしています。

## 12:00 リフレクションシートの記入



本文の内容を振り返り、改めて気づきを促すきっかけとするため、筆者の考える「ことば」を120字程度で定義するという設問を含むリフレクションシートを配布し、各自に宿題として取り組ませた。「分かったこと」「分からなかったこと」の記入欄もあり、それらの内容は三浦先生がまとめて、後日、全体で共有する。

## 11:55 グループごとに書き直す



全グループの発表が終わると、三浦先生は本文の内容に立ち戻るように指示。筆者が考えるものを定義する条件として、「外見的・具体的な特徴」「人間側の要素」の2つが必要とされていることを踏まえて、グループで再度定義させた。



グループで改めて話し合い、2つの条件をしっかりと考えて入れると、客観的な定義になると気づきました。



生徒は読解を進めながら考えたことや疑問をメモし、それを思考の過程の振り返り材料とする。三浦先生は黒板に板書をせず、生徒自身に思考をさせることにこだわる。

消しゴムを使わせないのも、思考の過程をリセットさせないためにです」  
 プリントを貼ったノートの下部には空白を設け、生徒は自分の思考の過程を記録していく。  
 本文では、「ものの定義には、外見的・具体的な特徴に加え、人間側の要素という2つの条件が必要だ」と述べられていたが、その条件を満たした定義となっていないグループもあった。例えば、「時計」の定義は、「人が時間を知りたい時に見る、小学生でも分かる生活に必要なもの」と、人間側の要素に偏っていた。三浦先生が筆者の考えに立ち戻って書き直すよう伝えると、「長針と短針があり、人が時間を知りたい時に見るもの」と、より客観性の高い定義となった。  
 リフレクションシートでは、筆者が考える「こ

とば」の定義を120字程度で書く宿題を課した。

「ほかの授業でも、学んだことの本質を100〜120字程度で整理するような課題を出しています。根拠や前提などを丁寧に追って結論を書く」と、その程度の文字数が必要だ。

リフレクションシートは提出させ、必ず三浦先生がコメントを添えて返却する。その後、書き直しをさせることで、常によりよい文章が書けるよう促す。

### 場づくりへの配慮

### 生徒一人ひとりの役割を観察し、ワークを活性化させる

今回の授業ではグループワークとしたが、それは、生徒個別の活動にすると時間内に定義を完成できる生徒が少ないと踏んだからだ。

「生徒一人ひとりが役割を持ち、考えを深め合ったからこそ、ことばを定義する活動ができたのだと思います」

グループワークを活性化させるために、三浦先生は生徒一人ひとりの役割を観察している。メンバーの役割に固定化が見られた場合、活動が一段落したら、メンバーを入れ替えることも想定していた。

今回の活動では、定義を考えるにあたり、「まず形状をことばにしよう。次に用途を考えよう」などと話し合いを方向づける生徒、それを受け

## 授業デザインシート

【教科・科目】国語・国語総合（現代文）

【設定時数】3時間中の3時間目

【分野・単元】評論

【本時全体の目標】具体例を的確に読み取り、結論につなげる

【テーマ・作品】「ものごとば」（鈴木孝夫）

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標（身につさせたい力・姿勢）	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
意味段落3を読み解く	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文を的確に読むスキルを習得する。</li> <li>本文に書き込みをしながら、関連づけて読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能</li> <li>思考力</li> <li>判断力</li> <li>主体性</li> </ul>	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>黒板に提示した本文を、生徒と同時に読む。ある程度スピードを意識しながら読む。一文ごとに丁寧に読む（縦）と同時に、文章間の関係を捉える読み（横）を並行して進めていく。</li> </ul> <p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>キーワードを的確に捉える。</li> <li>読み取った内容を可視化できるようにマークを書き込む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『机』の例はどこまでか、抽象論に戻った箇所はどこか</li> <li>「こう考えてみると」「そこで」などのつながりの言葉に留意するよう働きかける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒がただ作業的に読んでいないか注意する。</li> </ul>
具体例の分析・深化	<ul style="list-style-type: none"> <li>形式段落⑳～㉑の「机」の定義について考える。</li> <li>形式段落㉒㉓から帰納的に具体例を読み解く。</li> <li>身近な例を1つ挙げ、グループワークを行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思考力</li> <li>判断力</li> <li>表現力</li> <li>協働性</li> </ul>	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4人1組のグループワークを指示する。</li> <li>「物差し」「辞書」「下敷き」など教室にある身近なものを定義するよう指示する。</li> </ul> <p>【生徒】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実際にものを手に取りながら、多様な見方を出し合う。</li> <li>出た意見を的確かつ簡潔にまとめ、発表する。</li> <li>「机」はどのような観点から定義されるのかを理解する。</li> <li>「人間側の要素」と意味段落2の「ことばは世界認識の手がかり」という内容をつなげる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>『人間の外側に存在するものの持つ多くの性質』とは『机』の例ではどういった性質か、またそれとは対比的な内容はどのように表現されているか</li> <li>本文を手がかりに定義づけを行うよう促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループワークに慣れているが、固定的な役割意識が出始めているので、適宜メンバーの入れ替えを検討する。</li> </ul>
意味段落4を読み解く	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文を的確に読むスキルを習得する。</li> <li>本文に書き込みをしながら、関連づけて読む。</li> <li>「ことばとは～」という書き出しで記述をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>技能</li> <li>思考力</li> <li>判断力</li> <li>表現力</li> <li>主体性</li> </ul>	<p>【教師】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>生徒と同時に本文を読み、思考を働かせながら読むよう指示する。</li> <li>キーワードを的確に捉えるよう促す。</li> <li>縦に読みながらも横に読むことを意識させる。</li> <li>「ことばとは～」という書き出しで120字程度で記述をするように指示する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「ことばとは～」の後に続く内容をいくつか挙げることから考えるように働きかける。</li> <li>本文全体を踏まえた記述を促す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>抽象的な概念的な語句につまずいていないかを確認する。</li> <li>「ことばとは～」に続く表現が出ているか、一人ひとりを見て回る。</li> </ul>

\*三浦先生作成の授業デザインシートを編集部が一部改編

### 成果と課題

## 指導と評価の改善を重ねて、言葉の力を高めていく

そのような実践を通し、生徒の思考を分かりやすく伝える力や書く力は高まっている。今後の課題は、生徒の思考の深まりを明確に捉える評価方法の確立だ。三浦先生は、定期考査の改善に取り組んでおり、「羅生門」の単元では、所与のキーワードを用いて主人公の心情の変化を図式化させる問題を出した。

「図式化させることで、どれだけの確に理解できているのかが見えてきます。また、これまでは『定期考査を通して、生徒の力を深める』という観点が弱かったのですが、そうした問題を解くこと自体が、生徒の学びを深めることにつながると考えています」

今後も、指導と評価の改善を重ねて、生徒の言葉の力を高めていくことが、国語科教員としての自身の役割だと、三浦先生は語る。

「多様な人と一緒に生きていく中で、自分の思いが相手の心に響くように伝える力を育てる教科が国語です。その力は、人生のあらゆる場面で役立つ、武器になると考えています」

茨城県・私立大成女子高校

キャリア教育

# 学校設定教科を通して 生徒のキャリア設計を支援、 主体的な進路意識を醸成

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 創立100周年を機に、生徒の進路意識の向上を目指して、普通科における指導改善に着手

### 実践内容

- **キャリア教育と部活動の両立** 2010年度、放課後に実施していた進路プログラムを、正課に組み込み、部活動と両立しやすい環境を整えた
- **「総合的な学習の時間」の刷新** 10年度、社会で必要なスキルの育成を目指し、企業や各種団体と連携した体験活動などを「総合的な学習の時間」に導入
- **学校設定教科「キャリアデザイン科」の設置** 16年度、学校設定教科「キャリアデザイン科」を設置。地域と連携しながら、アクティブ・ラーニングを取り入れた探究活動を充実させ、進路意識の向上と、希望進路先で求められる専門スキルの育成を図る

### 成果と展望

- 「キャリアデザイン科」への教師の意識が高まり、積極的に取り組みのアイデアが出るようになった
- 生徒のコミュニケーション能力や進路意識が向上

## PROFILE



校訓として、「誠実・協和・勤勉」を掲げる。普通科・家政科・看護科があり、看護科では、看護科3年・専攻科看護科2年を合わせた5年一貫教育を行う。部活動も盛んで、吹奏楽部やバレーボール部などが、県代表として上位大会に出場している。

設立	1909(明治42)年
形態	全日制/普通科・家政科・看護科(5年制)/女子校
生徒数	1学年約230人

**2017年度進路実績(現浪計)** 国公立大は、釧路公立大、筑波大に2人が合格。私立大は、駒澤大、日本大、立教大などに延べ39人が合格。短大、専門学校進学69人。就職20人。

住所	〒310-0063 茨城県水戸市五軒町3-2-61
電話	029-221-4888

Web site <http://www.taisei.ac.jp/jp/tghs/>

## キャリア教育と部活動の両立を目指し、第1期の改革に着手

茨城県・私立大成女子高校は、「社会に役立つ女性の育成」を目指して創設された、茨城県内で最も長い歴史を持つ私立高校だ。2009年に創立100周年を迎えたのを機に、普通科の指導改善に着手し、段階的に推進している。

改革元年である10年度には、2つの取り組みを始めた。1つは、キャリア教育と部活動を両立させやすい環境の整備だ。当時の普通科では、特進コースと進学コースを設けていた。特進コースでは、様々な進路プログラムを通して進路意識の向上を図り、推薦・AO入試を中心に進学実績を上げていたが、プログラムの多くが

放課後に行われていたため、特進コースの生徒は部活動に遅れて参加せざるを得なかった。一方、進学コースでは、キャリア教育をより充実させたいという思いがあった。そこで、コース制を廃止し、進路プログラムを、各教科・科目の授業や「総合的な学習の時間」といった正課に組み込んだ。例えば、外部講師を招いて行っていた特別講義は、各教科・科目の担当教師が、生徒の実態に合わせて講師を選び、年1回、自分の授業に招くことにした。この取り組みは、コース制に戻った現在も、特別授業「コロキウム」となり継続している。

もう1つの取り組みは、「総合的な学習の時



茨城県・私立大成女子高校教頭  
**寺門恵子** たらかど・けいこ  
教職歴35年。同校に赴任して36年目。「他から学ぼうとする姿勢を常に忘れずにいたい」

茨城県・私立大成女子高校  
**糸川明子** いとかわ・あきこ  
教職歴27年。同校に赴任して28年目。入試広報部副部長。「生徒たちの長所はもちろん、短所も生かせるような指導を目指している」

茨城県・私立大成女子高校  
**森聖子** もり・せいこ  
教職歴25年。同校に赴任して22年目。学習指導部部長。「何事も全力を尽くし、学ぶことをともに楽しみ、未知に挑戦する」

茨城県・私立大成女子高校  
**鈴木博之** すずき・ひろゆき  
教職歴22年。同校に赴任して22年目。教務部副部長。「生徒一人ひとりが自己肯定感を持てる場面をつくりたい」

間」の内容の刷新だ。地域や社会とのつながりを深め、卒業後に必要な教養やスキルの育成に力を注げるよう、「ベイスス」というプログラム学習を導入した。1年次には「女性としての私」、2年次には「国際社会と私」、3年次には「社会で活躍する私」というテーマを設定。NPOやNGO、地域の企業・団体などと連携しながら、新聞の活用法や金銭教育、企業見学、海外からの留学生との交流などを進めた。そして、この「ベイスス」、前述の「コロキウム」、大学の学部・学科などの進路情報の提供や調べ学習を行う「進路ガイダンス」を、「大成キャリアデザインプログラム」の3本柱と位置づけた。

寺門恵子教頭は、こうした第1期の改革の成果を次のように振り返る。

「部活動も勉強も頑張りたいという、意欲的な入学者が増えました。単に進学実績を追うだけでなく、一人ひとりの生徒が、卒業後の進路をしっかり考えながら、部活動にも打ち込んでいく姿が、地域に受け入れられたためだと捉えています」

## 学校設定教科を新設し、生徒のキャリアの主体的な設計を支援

「ベイスス」は、生徒の視野を広げ、社会へのイメージを豊かにする半面、課題もあったと、学習指導部部長の森聖子先生は振り返る。

「体験活動などによって生徒が大きな刺激を受けたことは、事後のレポートなどからう

かがえましたが、それを全員が実際の進路選択や学習意欲に結びつけられているわけではありませんでした。与えられた活動だけではどうしても受け身になり、一時的な感動に終わってしまうことも多いと感じました」

そこで、「ベイスス」は15年度入学生（現3年生）の卒業とともに終了することにした。そして、生徒自身が主体的に参加し、深く考える場を設けるとともに、地域貢献や女性の生き方という視点をさらに強化したいという思いの下、次なる改革へと踏み出した。

第2期の改革は、16年度以降の入学生を対象とする学校設定教科「キャリアデザイン科」を新設して本格化した。これは、3年間を通して、女性としてのライフサイクルの追究や、キャリアの主体的な設計・実現を目指し、地域と連携した取り組みを行う教科だ。準備は15年度に始め、森先生や、入試広報部副部長の糸川明子先生、教務部副部長の鈴木博之先生ら、第1期から改革に携わってきた教師に、「ベイスス」の担当者らを交えた計10人で、取り組み内容の詳細や教材などを選定し、具体化させていった。プログラムは、次の通りだ（P.32図1）。

1年次の「キャリアデザインI・A」では、キャリア設計の考え方や方法を学んでいく。職業や自分の生き方、課題の発見と解決方法を考えたり、社会で活躍する女性と直接話をする場を設けたりと、その内容は多彩だ。3学期には、2日間のインターンシップを行い、「働くとはど

図1 「キャリアデザイン科」のプログラム	
1年次 「キャリアデザインI・A」	
概要	4～5人のグループワークを中心に、課題発見・解決力の育成、自己管理の習慣化、職業理解の深化、キャリア形成などを図る。
主な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>手帳によるスケジューリング (PDCAの習慣化)</li> <li>インターンシップ (2日間)</li> <li>職業や自分の生き方などを考えるプログラム など</li> </ul>
2・3年次 「キャリアデザインII・B」	
概要	探究学習を通して、主体的・対話的で深い学びを実現。
主な取り組み	<b>保育・幼児教育フィールド</b> 監修者◎茨城女子短期大学保育科 <ul style="list-style-type: none"> <li>幼稚園・保育園での定期的な体験実習</li> <li>幼児安全法講習 など</li> </ul>
	<b>看護・医療フィールド</b> 監修者◎同校看護科 <ul style="list-style-type: none"> <li>病院での体験学習</li> <li>医療職ガイダンス など</li> </ul>
	<b>ホスピタリティフィールド</b> 監修者◎茨城大学人文社会科学部の小原規宏 <small>おぼろのひろ</small> 准教授 <ul style="list-style-type: none"> <li>ホテルや高齢者施設などでの体験学習</li> <li>インターンシップ など</li> </ul>
	<b>アート表現フィールド</b> 監修者◎専門学校 文化デザイナー学院 <ul style="list-style-type: none"> <li>デザイン・イラストの基本実習</li> <li>コンピューターグラフィックスの実習 など</li> </ul>
	<b>地域デザインフィールド</b> 監修者◎一般社団法人 i.club <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の魅力を再発見するフィールドワーク</li> <li>地域の産品を使った新商品の開発 など</li> </ul>

\*学校資料を基に編集部で作成

「目標から逆算して計画を立てる力は、大

ういうことか」を体験する。取り組みを実りあるものにするため、PDCAサイクルの確立を重視し、手帳を使ったスケジューリングの指導も開始した。起床・就寝・勉強開始時刻や連絡事項などの記入の有無を教師がチェックして点数化し、成績に反映させている。次第に、定期考査や部活動の大会といった目標を意識しながら生活できるようになる生徒が多いという。鈴木先生は、こう述べる。

「目標から逆算して計画を立てる力は、大  
学入試だけでなく、社会に出てからも必要となります。今後は、『Classi』(※1)のスケジュール機能を活用し、学習時間や成績をゲ

ラフ化することを検討中です。自分の計画が視覚的に捉えやすくなれば、生徒へのさらなる意識づけにつながると考えています」

## 2年次以降は、将来を見据えて専門性の向上を図る

2・3年次の「キャリアデザインII・B」では、「保育・幼児教育」「看護・医療」「ホスピタリティ」「アート表現」「地域デザイン」という5つのフィールドから、生徒が自分の興味や志望に基づいて1つを選び、探究学習に取り組む。選択理由が曖昧な生徒には、各フィールドの担当教師が面談を行い、生徒の興味や将来の目標

などがフィールドの趣旨と本当に合致しているかどうかを探り、ふさわしいフィールドが別にあると思われる場合には、再考を促す。

「同じフィールドを希望している生徒でも、『人のために尽くしたい』『自分の力を試したい』といった、やりたいことの本質的な部分では志向が異なります。適切なフィールドを選択できるように、面談で生徒の内面を掘り下げていきます」(鈴木先生)

「キャリアデザイン科」の新設時には、専門性が高くなる2・3年次の取り組みをいかに充実させるかが、最大の課題となった。そこで、各フィールドの専門家や機関に内容の監修を依頼し、講座や実習などでも連携を図ってもらうことにした。例えば、観光や福祉といった、人と接する職業の志望者に向けた「ホスピタリティ」では、茨城大学人文社会科学部の小原規宏おぼろのひろ准教授の監修により、観光やホスピタリティとは何かを学ぶ。さらに、水戸市の観光PRを担う「水戸の梅大使」の経験者から、笑顔や挨拶を始めとする「おもてなし」に必要なスキルを学び、それを、借楽園の園内ガイドのボランティア活動で実践する。また、自らが地域をデザインする人材になることを目指す「地域デザイン」では、商品開発などを通して学校と地域を結ぶ活動を行う一般社団法人「i.club」の監修により、県内の物産を用いた新商品の開発に挑戦する。このフィールドを設置する準備として、15年度から2年間、森先生を顧問とする「探

\*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図2

「キャリアデザインⅡ・B」の振り返り(例)

学習報告書		出欠の記号 出席:○ 欠席:△ 公文:△ 遅刻:× 早退:△	
授業日	5月9日(火) 5:00	時間目	出欠
担当先生	所属 日本おもてなしトレーナー協会	所属	
	お名前 先生	お名前	先生
学習した内容	具体的な内容		
<ul style="list-style-type: none"> <li>第一印象が良くなるには?</li> <li>第一印象が良い人はどんな人?</li> <li>逆に悪い人はどんな人?</li> </ul>	転校生だと聞くと分かって、自分がどんな気持ちになるか比べ、社会に出てからは、第一印象を良くする方法を学んだ。		

各フィールドで、活動ごとに「学習報告書」を作成し、学習内容を振り返るとともに、よかった点や改善点、自己評価、次回の目標などを言語化する。

\*同校の資料を一部抜粋して掲載

究部」という部活動を設け、ICEDの協力の下、地元企業と協働で、干し芋を用いた「ほしいもグラノーラ」の開発・販売を実現させた。

『地域デザイン』は、教師・生徒両方にとって難易度の高い取り組みなので、まずは部活動として始めてみて、プロセスを検証してから授業を始めたいと考えました。試行錯誤

の連続でしたが、地元企業との交流から、地域には『子どものために何かをしたい』という方が想像以上に多いと気づき、地域と協働する大切さを改めて感じました(森先生)

16年度入学生(現2年生)は、1学期に、商品開発やアイデアの発想法を学んだ後、「ほしいもグラノーラ」の新風味を試作し、協働する企業に自分たちのアイデアを提案した。2学期以降は、独自の新商品の開発・販売を目指す。

### 言語化を通して学びを深め、主体的に行動し始める生徒たち

「キャリアデザイン科」では、1・2年次を通して、アクティブ・ラーニングにも力を入れている。1年次では4〜5人のグループワークを中心とし、生徒が主体的に役割分担を決めて、活動に取り組む。そうした中で、自分の考えを的確に表現する力が養われていくという。2年次では、取り組みで得た気づきや学びを言語化する機会を定期的に設けており、その1つである書くことによる振り返りは、全フィールドで取り入れている(図2)。また、フィールドごとの工夫も見られる。例えば、「ホスピタリティ」では、他者への理解を深められるよう、認知症サポーターによる講習を設けているが、その振り返りとして、「自分たちの経営する美容室に、認知症の患者が家族につき添われて来店した」という設定の寸劇を、グループごとに行った。糸川先生は、次のように語る。

「生徒自身が配役やストーリーを決めて演じることにより、『決して患者を怒ってはいけない』といった、講習で身につけた知識を深い理解につなげられると考えました。『ホスピタリティ』では、こうした寸劇やプレゼンテーションをよく行いますが、回を重ねるごとに、生徒はどんどん主体性を増して積極的に行動できるようになります」

### 「キャリアデザイン科」の成果を、大学進学実績につなげていきたい

同校の指導改善は、「キャリアデザイン科」に結実しつつある。「キャリアデザイン科」への教師の意識も高まり、会議などで積極的に取り組みのアイデアが出るようになった。今後は、より多くの教師が「キャリアデザイン科」の授業を行えるよう、授業公開なども積極的に進めていく予定だ。また、生徒は「キャリアデザイン科」での活動を通して、自分の考えを具体的に伝えられるようになり、進路選択に際しても、自分の志望を順序立てて明言できるようになった。このような成果を、大学進学実績につなげていくことも、今後の目標の1つだ。

『キャリアデザイン科』で構築したアクティブ・ラーニングの指導ノウハウが、各教科・科目に浸透すれば、全校体制での指導改善はより充実するでしょう。今後も、生徒の姿や指導の効果を先生方と共有しながら、取り組んでいきたいと考えています(森先生)

石川県立野々市明倫高校  
進学実績の向上

進路指導課と学年団が  
連携して指導改善を推進し、  
過去最高の進学実績を実現

変革のステップ

背景と課題

- 学年ごとに目標や取り組みが異なり、大学進学実績が安定しなかった
- 生徒の進路意識に課題があった

実践内容

• 進路指導課と学年団の連携

**進路への意識づけ** 生徒が広い視野を持ち、全国の大学から進学先を選ぶよう、進路プログラムを充実させた

**模試データの活用** ベネッセの「進研模試」などのアセスメントの結果分析を強化し、指導改善に反映させた

**国公立大学の個別学力検査対策を強化** 3年次6月から、最難関国公立大学志望者を対象に、全校体制で記述・論述問題の添削指導を開始した

- 「思考する授業」の推進 全教科・科目の授業にアクティブ・ラーニングを導入した

成果と展望

- 全校体制で指導改善に取り組めるようになった
- 生徒の進路意識や学力が向上し、進学実績が躍進

**本当に進みたい大学を選べるよう、生徒の視野の拡大を目指す**

石川県立野々市明倫高校は、同県中部に位置する野々市市で最初に設立された県立高校だ。文武両道を尊ぶ活気ある学校として、地域から信頼されているが、以前は学年ごとに進路目標や取り組みに違いがあり、進学実績も学年による差が小さくなかった。また、積極的に上位の大学を目指そうという生徒の進路意識に課題があり、学力があるにもかかわらず、低学年次に模試で合格圏内と判定された、地元私立大学に目標を定めてしまう生徒もいたという。そこで、2014年度入学生生から、進路指導課と当時の1学年主任（現・同県立金沢西高校

PROFILE



校名は、金沢藩の藩校「明倫堂」に由来する。校訓は「聡(さと)く、正しく、運(たくま)しく」。全教室にプロジェクターを設置し、ICTを活用したアクティブ・ラーニングに力を入れている。部活動が盛んで、男子ソフトボール部などが全国大会で活躍している。

設立	1983 (昭和58) 年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約280人

**2017年度入試合格実績 (現浪計)** 国公立大は、北海道大、東北大、富山大、金沢大、名古屋大、富山県立大、石川県立大などに74人が合格。私立大は、青山学院大、明治大、立命館大などに延べ537人が合格。

住所	〒921-8831 石川県野々市市下林3-309
電話	076-246-3191
Web site	<a href="http://www.ishikawa-c.ed.jp/~meirih/">http://www.ishikawa-c.ed.jp/~meirih/</a>

主幹教諭)が連携し、指導改善を推進し始めた。最初に取り組んだのは、1年次での進路意識の向上だ。進路指導課では、「国公立大学志望者の割合を学年の80%にする」という目標を打ち出し、それを実現するための取り組みを、学年団とともに工夫した。例えば、以前は6月に進路希望調査を行っていたが、生徒が全国の大学・学部やそこで学べる学問などについてある程度の知識を身につけ、学びたい学問の方向性を十分に考えてから調査を受けられるよう、9月に変更。1学期と夏季休業期間を通して、進路説明会や大学・学部調べといったプログラムを充実させることにした。また、目的意識を持つ



石川県立野々市明倫高校  
**竹中隆司** たけなか たかし

教職歴31年。同校に赴任して2年目。主幹教諭。教務課長。「教師の仕事は、生徒の底知れぬ可能性を引き出してあげること」



石川県立野々市明倫高校  
**中田修一** なかた しゅういち

教職歴28年。同校に赴任して4年目。進路指導課長。「教育に関するすべての答えは学校にある。生徒の声を聞くため、常に現場に立つ」



石川県立野々市明倫高校  
**杉本憲子**すぎもと りこ

教職歴29年。同校に赴任して10年目。3学年主任。「人材」を育てるのではなく、「人間」を育てる」



石川県立野々市明倫高校  
**辻将太** つじ・しょうた

教職歴10年。同校に赴任して6年目。「10対10」。学習も部活動も本質は同じ。どちらをも全力で頑張らせてい」

て文理選択に臨めるようにしたいという思いもあった。さらに、調査用紙も改編。選択肢として示す大学・学部のリストを、県内や近隣県の私立大学を記載したものから、全国の国公立大学を中心としたものへと改めた。進路指導課長の中田修一先生は、当時は次のように振り返る。

「低学年次に私立大学を目標にすると、生徒は力を入れる教科・科目を絞ってしまい、結果的に一層進路選択の幅を狭めてしまします。また、進級・卒業にかかわる教科の学習が疎かになることもあります。まずは国公立大学に目を向け、受験に必要な教科の学習に集中してほしいと考えました」

### 主体的な学習集団の形成を進め、生徒同士が切磋琢磨する環境を整備

次に、1・2年次での基礎学力の完成を目指し、学習指導も工夫した。どの生徒も学習内容をすべて理解できる授業を目指して指導の質の向上を図り、効率よく復習できるよう、週末課題の問題を精選した。また、進路指導課の提案により、ベネッセの「スタディーサポート」や「進研模試」の結果分析を強化。学習内容の定着に不安がある生徒が多い分野・単元を洗い出し、指導に反映させることにした。特に課題が見られる教科・科目では、進路指導課から担当教師に、手厚く解説してほしい分野・単元を具体的に示しながら、今後の指導を検討した。

「最初に率先して行動する教師がいるから

こそ、新しい取り組みが学校に根づいていきます。そこで、提案者である進路指導課が主導することにしました」(中田先生)

生徒には、アセスメントの受験日の放課後に自己採点し、どこができなかったのか、それはなぜなのかをしっかりと見直すよう指導し、振り返りの習慣化を図った。また、担任は採点用紙を回収して、それを基に、教科・科目の担当教師が、すぐに結果の分析に着手することにした。早期に、生徒の課題を反映させた指導を行うためだ。14年度入学生を3年間担任した数学科の辻将太先生は、次のように述べる。

「進路指導課からは、卒業生の成績推移から算出した、模試各回の成績の目安や学年の目標なども示されました。それらに基づいて、中・長期的な展望を描きながら、目の前の生徒を伸ばす取り組みを形にしていきました」

主体的な学習集団の形成も1年次から重視し、部活動が休みになる定期試験前の1週間は、放課後に全生徒が教室で自主学習を行う。学習しやすいよう、1人で問題に向き合う時間、友人や教師に質問できる時間といった区切りを設けた。当初は、私語をする生徒も見られたが、次第にどの生徒も集中するようになった。

2・3年次には、「エクシード」という選抜クラスを、文系・理系に1つずつ設置した。以前も選抜クラスを設ける学年があったが、それは、成績のみを基準に所属者を決めたものだったためか、生徒は選抜クラスに入ったことに満足

し、その後の学習意欲が伸び悩む傾向が見られた。そこで、エクシードクラスでは、金沢大学以上の難易度の大学を志望する成績上位者の中から、所属希望者を募ることにした。

「切磋琢磨し合える集団とすることで、高い志望を抱く生徒は、その実現に向けて一層前向きになれるでしょう。そうすれば、他クラスの生徒も刺激を受け、学年全体の活性化につながると考えました。実際、ほかのクラスには『打倒エクシードクラス』を目標に頑張る生徒が出てくるなど、よい意味で競い合う雰囲気が生まれました」（中田先生）

### 最難関国立大学志望者を対象に、全校体制で個別学力検査対策を推進

3年次では、国公立大学の個別学力検査を見据え、記述・論述問題対策を強化した。4月には、全生徒への意識づけとして、記述模試を導入し、6月からは、旧帝大などの最難関国立大学を志望する生徒を対象に、各教科・科目の個別添削指導を始めた。進路指導課では、全教師に添削指導への協力を呼びかけ、教科内で話し合っ

て指導計画を立ててほしいと伝えた。教科・科目によっては、生徒が互いの頑張りや成果などを共有する場を定期的に設け、学習意欲のさらなる向上を図った。

以前はセンター試験対策に重点を置き、その結果が出てから、記述・論述問題対策を本格化させていたが、個別学力検査での得点が伸び悩

む生徒が少なくなかった。また、担任は、生徒が対策を必要としているかどうかを把握し、対策を希望する生徒一人ひとりに対して、各教科・科目の担当教師に対策を依頼していたため、担任への負担が大きかったという。

「教師1人では、個別学力検査のための指導を充実させようとしても難しいと思います。そこで、先生方が一丸となるよう、体制を整えていきました」（中田先生）

### 「書く」を中心に、生徒の考えを深める「思考する授業」

大学入試改革への対応にも力を入れている。「思考する授業」（図1）として、全教科・科目でICTを活用しながら、グループ協議やプレゼンテーションなどを取り入れたアクティブ・ラーニングを進めている。特に重視するのは、生徒が自分の意見を書くことだ。国語のある授業では、毎時間いくつかのグループに発表させ、その内容をプロジェクターで表示し、それを参考にしながら、一人ひとりが自分の記述を振り返り、思考を深める時間を設けている。教務課長の竹中隆司先生は、次のように話す。

「思ったことを自由に書いてみるように伝えると、引っ込み思案な生徒でも、文章では積極的に意見を述べます。『書く』を中心に据えることで、生徒の授業への意欲を引き出せるだけでなく、個別学力検査対策にもつながると考えました」

この取り組みを推進する原動力となったのは、各教科・科目の若手教師を中心に20人ほどが所属する「アドホック・チーム」だ。メンバーが「思考する授業」を積極的に公開すると、生徒が進んで発表したり、真剣に考えたりする姿を目のあたりにするためか、次第にアクティブ・ラーニングに意欲的になる教師が増えていったという。17年度からは、全教師が行ってきた年1回の研究授業において、必ず「思考する授業」を実践し、その指導のノウハウを全校で共有することにした。その様子をビデオで撮影し、事後の検討会の資料に用いる。

「教師の問いかけの工夫によって、生徒の思考は深まります。研究授業や検討会を通して、そうした発問力が高まれば、授業が一層充実していくに違いありません」（竹中先生）

また、生徒が「思考する授業」で身につけた、書く力や話す力などをさらに生かせるよう、推薦入試の指導改善にも力を注ぎ始めた。小論文・面接指導に、管理職も含めてより多くの教師がかかわることになり、生徒には、「お世話になった先生には可否を必ず報告しなさい」と伝えられている。合格の知らせを聞いた教師はよりよい指導を目指し、残念な報告を受けた教師は指導の改善を検討しているという。

「大学入試改革の進展に伴い、推薦入試の変化も進んでいます。所定のテーマに対して、根拠を示しながら反論したり、主張を展開したりする力の育成が一層必要になっていくと



実感する教師を増やし、指導改善への意識を高めていきたいと考えています」(中田先生)

**地域の課題への探究を通して、学問と社会との関連を意識させる**

「思考する授業」で育成を目指す力は、簡単には身につかないため、それを支える取り組みを2つ設けている。1つは毎日の朝学習で、1年次に新聞のコラムを教材とし、①記事中の重要語句の意味を調べる↓②記事を要約↓③記事の感想を書く↓④感想の発表、という日替わり

プログラムに取り組んでいる。朝学習には、以前は読書の時間を設けていたが、個別学力検査対策の強化やアクティブ・ラーニングの推進に応じて、文章の作成・発表を行うことにした。

もう1つは、2年次の「総合的な学習の時間」に地域の課題を探究する「Meirin Glocal Project」だ。15年度に、市内飲食店とのニュー・メニューの共同開発や、商店街でのインタビュー調査といった試行を経て、16年度から本格化した。同年度2年生(現3年生)は、同じ学問に関心を持つ者3〜4人がグループになり、近隣の公共機関や企業などを訪問し、その進化・発展のプロセス、課題と改善案などをレポートにまとめて発表した。この学年を1年次から担当する3学年主任の杉本憲子先生は、こう語る。

「答えのない問いと向き合うことで、生徒は思考力を高めていくでしょう。また、学問と社会とのかわりに気づき、その学問を学びたい理由を具体化してほしいという思いもありました」

**進路目標を高く持ち、挑戦し続ける生徒たち**

一連の取り組みの成果は進学実績の躍進に結びつき、指導改善を始めた14年度入学生の学年では、17年度入試において、同校創立以来最多の国公立大学合格者数を記録し、また、複数の旧帝大現役合格者を輩出した。1年次から進路への意識づけを重ねたことが、高い目標に挑

戦し続ける姿勢につながった。個別学力検査でしつかり得点できた生徒も多く、記述力や思考力の向上がうかがえる。また、「思考する授業」では、意欲的に取り組む生徒が目立つ。グループ協議などでは、入学当初は自信がなさそうに話していた生徒も、次第に堂々と自分の考えを発表できるようになるといふ。一方、課題は、「思考する授業」への目的意識や取り組み方に、学年や教科・科目によって違いが見られることだ。

「統一した指針の下、生徒の実態に応じた工夫を行えば、より効果的な指導が実現すると思います。そこで、3年間の各時期の目標や力を入れたい取り組みなどについて、教師間の目線合わせを強化できるよう、アクティブ・ラーニングのグランドデザインの作成を検討中です」(杉本先生)

14年度入学生の学年の取り組みは以後の学年に継承され、進路指導課との連携の下、さらなる発展が図られている。今後は、生徒自身が3年間の計画を立て、それを最後までやり遂げられる「人間力」の育成を視野に入れ、全校体制で取り組みを進化させていく。

「社会で求められる力は時代とともに変化するため、指導改善は絶えず続けなければなりません。大学入試改革が進む現在であれば、我々教師には、なおさら指導の課題を早期に把握し、解決する力が必要です。生徒の成長と自己実現のために、今後も先生方と力を尽くしていきたいと考えています」(中田先生)

自校の指導ツールを他校の教師とともに検討し、各校の生徒特性に合った形へ改善を図る本コーナー。今回は、社会人講話などの進路講演会で、生徒が考えを深め、整理するための「進路講演会 振り返りシート」について検討する。

## 平成29年度学びのフローラ 感想・メッセージ記入用紙

年	組	番	名前
<p>松竹梅のどれかに○をつけよう。</p> <p>松 社会に出て働いている自分を明確にイメージすることができた。</p> <p>竹 社会に出て働いている自分をイメージすることにワクワクしてきた。</p> <p>梅 社会に出て働いている自分をなんとなくイメージすることができた。</p>			
自己評価			
この場で初めて知ったこと・これからしようと思ったこと			
講師の方にメッセージ			

## Before

北海道旭川東高校  
花尻健明先生提供

「全学年  
進路講演会 振り返りシート」

## 課題

- 1 「面白かった」といった感想レベルにとどまり、自己理解などにつながる深い振り返りにならないことがある
- 2 他者の生き方・考え方を自分と結びつけたり、比較したりすることで、高校生活の中でできること、すべきことを考えさせたい

## 検討メンバー



ツール提供者

北海道旭川東高校

花尻健明

はなじり・たけあき



群馬県立下仁田高校

高橋真人

たかはし・まさと



埼玉県立浦和高校

岡本眞一郎

おかもと・しんいちろう

具体的な行動につながる  
モヤモヤ感に向き合わせたい

北海道旭川東高校では、月に1回程度、希望者に対して、卒業生を中心とした大学生や地域で活躍する社会人による進路講演会（学びのフローラ）を放課後に実施している。多様な人生観に触れることで、自身の進路を考えるきっかけとすることがねらいだ。ただ、現状の感想・メッセージ記入用紙では、「講演は面白かった」とその場の満足感を記入するだけの生徒もいて、具体的な行動、変化を生むために必要な深い振り返りにつながりにくいと花尻先生は感じている。今回は、他者と自分を照らし合わせ、自身の生き方に対する考えを深めるきっかけとなる用紙を開発することが、検討会のテーマだ。

# 全学年 進路講演会 振り返りシート



## After

### 改良ポイント

- 1 講師の生き方・考え方で、共感できたこと、違うと思ったことを整理させる  
講師の話を自分の価値観や経験と照らし合わせながら整理させることで、聞いたことを深く理解させる。
- 2 将来取り組みたいことや、今できること、すべきことを考えさせて今後につなげる  
講師の話から世界観がどのように広がったかなどを言語化させ、そこの気づきによって日々の高校生活をどのように変えていけるかを考えさせる。

### 平成29年度 進路講演会 振り返りシート

年	組	番	名前
1			講師の方の生き方、考え方で共感できたこと・自分とは違うと思ったこと
2			講演を通して知った社会(地域、世界)の課題、将来取り組んでみたい社会の課題
			講演をきっかけに、高校生活で取り組もうと思ったり、変えようと思ったりしたこと
			講師の方へのメッセージ

他者と自分を照らし合わせ、「将来→今」の順に考えさせる

最初に、自分の価値観や経験を基に共感できたこと、違うと思ったことを書かせることで、講演内容を自分に引きつけて考えられるようにした。それにより、講演が面白かったかどうかだけでなく、自分と向き合うことが期待できる。また、地域を始めとする社会課題の解決に取り組む講師も多く、生徒も地域活性化などの社会課題に関心を持っているため、どんな社会課題にかかわってみたいか、高校生活で取り組めそうなことは何かを書かせて、将来の自分と今の自分を接続して考えられるようにした。なお、「社会に出て働いている自分をイメージできたか」という問いは、進路講演会だけで実現できるものではないため、削除した。

次ページでは、3人の先生方の検討の様子をダイジェストで紹介!



このマークのある図版は、加工可能なデータとして、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<http://berd.benesse.jp>) からダウンロードできます。「HOME → 教育情報 → 高校向け → 生徒指導・進路指導ツール集」をご覧ください。

## 全学年 進路講演会 振り返りシート



## 活用の流れ

- 1 あらかじめ、  
進路講演会の目的・振り返る意義を  
生徒にしっかり認識させる
- 2 進路講演会后、シートに記入させ、  
教師に提出
- 3 生徒が自分と向き合っていると  
感じられる箇所に教師が下線を引いたり、  
コメントを加えたりして、  
フィードバックをする

自ら挑戦することの大切さに  
気づく問いを投げかける

改訂のポイントとなったのは、講演会のねらいを改めて確認し、それに沿った用紙とすることだ。旭川東高校の進路講演会「学びのフロア」では、講師が進路をどのように実現したかといった「職業への就き方」よりも、「なぜ、そうした進路を選んだのか」「今、その進路をどんな思いで歩んでいるのか」を話してもらうことを重視している。それは、主体的に学ぶことや挑むことの楽しさに生徒が気づき、高校生生活をさらに充実させようと具体的に動き始めることをねらいにしているからだ。それを踏まえ、進路講演会后、生

徒が短時間で自分を深められる問いを厳選した。同時に、そうしたねらいを生徒に言葉でしっかりと伝えることの大切さも確認した。

講師の話に対して、「この人の考えは自分と違う」という部分にも目を向けさせることで、むしろ素直に講師と向き合えるのではないかと、仮説も出された。「自分には講師のような勇氣はない」などの後ろ向きな言葉を発した生徒には、教師が「一步を踏み出すのは簡単ではないよね」などとその感情を受け止めた上で、「講師は、君たちのような普通の高校生に何を言いたかったのかな」と個別に問いかけ、進路講演会で生まれたモヤモヤ感を効果的に持続させる指導の大切さも指摘された。

検討メンバーの先生に、自身の指導観や自校の生徒特性を踏まえて、  
ツールの活用方法や留意点などをお話いただきました

## 情熱に触れさせることで、生徒の枠を外したい

北海道旭川東高校 花尻健明 はなじり・たけあき



本校の生徒の大半は、入学時、北海道大学を志望しますが、北海道大学という選択肢の中でしか進路を考えない生徒、もっと高い目標を目指せるのに自分で上限をつくってしまっている生徒もいます。様々な講師の情熱に触れることで、枠を取り外すきっかけになってほしいと思います。進路講演会の最終目標は、高校生生活を充実させることが未来をつくることであると理解させることだと私は考えています。目の前の物事に、先の見通しを持って一生懸命に取り組んでもらいたいですし、その意味で、今回の改訂で振り返りシートにも、生徒が未来と今をつなげる機能を盛り込むことができました。

旭川市でも、地域活性化は重要な課題です。地域には、独自の視点で様々な物事に挑戦する人がいますから、生徒にそうした人たちの存在をもっと知らせたいです。ただ、地域活性化は、正解が簡単に出ない難問です。生徒にも性急に正解を求めることなく、考え続けさせたいのです。進路講演会を通して考えたことを、時間を置いて再度振り返る機会もつくりたいですね。

花尻先生プロフィール 教職歴10年。同校に赴任して3年目。進路指導部。数学科。「常に前向きに、当たり前のことを当たり前にする」

学校プロフィール 全日制・定時制/普通科/共学/1学年約2800人/2017年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、旭川医科大学/北海道大、東京大、東京工業大、九州大などに145人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ195人が合格。

## 生徒の「今」を肯定した上で、チャレンジを引き出す

群馬県立下仁田高校 高橋真人 たかはし・まさと



本校で振り返りシートを活用する場合、生徒に問いかける言葉にはとことんこだわりたいです。例えば、「共感できたこと」という尋ね方よりも、「話の中で、すてきだなと思っただころはどこだろう。なぜ、そう思ったのだろう」といった問いの方が答えやすいかもしれません。また、進路講演会を通して「自分の生活を変えたいこと、新たに挑戦したいこと」を生徒に迫りがちですが、私は「今後も続けたいこと」を聞いてあげたいです。平素のあり方を尋ね、今の生活は間違っていないと認めた上で、「変わりたいこと」「やってみたいこと」を聞く配慮が、自己肯定感の低い生徒には特に必要だと思います。

地域で活躍する講師の話聞いた後、生徒は大きな夢を語る代わりに「私が地域にできることはごみ拾いだ」と答えるかもしれません。そういう「今の自分」に無理のない言葉を受け止めた上で、ほかにもできることはないのかを生徒に段階的に考えさせたいです。生徒に寄り添った問いかけのスキルをもっと磨きたいと思います。

**高橋先生プロフィール** 教職歴14年。同校に赴任して9年目。教務主任。数学科。「物事に謙虚に、楽しく取り組む大切さを、自らの姿を通して生徒に教える」

**学校プロフィール** 全日制/普通科/共学/1学年約60人/2年次からアドバンスコース、ビジネスコース、カルチャーコースの3コースに分かれる/2017年度進路実績(現役のみ)/4年制大学・短大進学3人、専門学校進学20人、就職22人。

## 教師間でねらいの共通理解を図り、生徒に伝える

埼玉県立浦和高校 岡本眞一郎 おかもと・しんいちろう



過去の勤務校では、生徒の進路意識を向上させるため、多様な領域の社会人に仕事の魅力を語ってもらいました。一方、現任教では、第1志望大学が明確で様々なことに興味・関心を持つ生徒が多いため、部活動や行事で多忙な中、どんな受験勉強をしていたかを卒業生に語ってもらうことも重視しています。進路講演会のあり方は学校の教育方針、生徒の状況によって大きく変わります。

振り返りシートを本校で活用する場合、講演を聞いて興味を持った社会課題を挙げさせ、さらに今の時点で考えられる解決の道筋を書かせたいです。社会に対して「何かできるはず」と自信を持っている生徒には、講演内容から派生して、自分の生き方を大胆に考えさせる問いを投げかけたいですね。

進路講演会に対する教師の共通理解と、それを踏まえた声かけが不十分だと、生徒は「この仕事は自分の目指すものではない」と表層的に捉えがちです。「難題に挑むことの面白さに気づく」など、ねらいを理解させるための教師の目線合わせは必須です。

**岡本先生プロフィール** 教職歴35年。同校に赴任して1年目。進路指導部。英語科。「活躍できる場を与え、対話を通して導き、生徒一人ひとりに成長や自立を美感させたい」

**学校プロフィール** 全日制・定時制/普通科/男子校/1学年約360人/2017年度入試合格実績(現役のみ)/国公立大は、東京大、京工業大、一橋大、京大などに100人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ182人が合格。

改良したいのに、どうすべきか分からない……

### 指導ツールを募集しています!

「改良! 指導ツール ビフォーアフター」では、取材にご協力いただける先生及び取材を検討させていただく「指導ツール」を募集しています。「自校で長年使っているツールを見直したい」「ツールのより効果的な活用法を検討したい」といった、課題意識をお持ちの先生方のご応募をお待ちしております。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、必要事項①~④をご入力の上、指導ツールを添付して下記のe-mailアドレスにご送信ください。

※送信前に一度、生徒様の情報が削除されているかご確認をお願いいたします

- ①学校名・お名前
- ②分掌・ご教職歴
- ③ツールの内容(目的・活用時期・活用方法)
- ④ツールに対する課題意識、改善要望

view21\_since-1975@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉 この「改良! 指導ツール ビフォーアフター」のツール募集でご提供いただく個人情報は、今後の企画を検討する目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口(0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時~21時)にて承ります。(株)ベネッセコーポレーション CPO(個人情報保護最高責任者) 上記をご承諾くださる方はご送信ください。



# 主体的に学び続ける力を育成し、 世界で活躍できる化学者を育成

首都大学東京 都市環境学部 分子応用化学コース

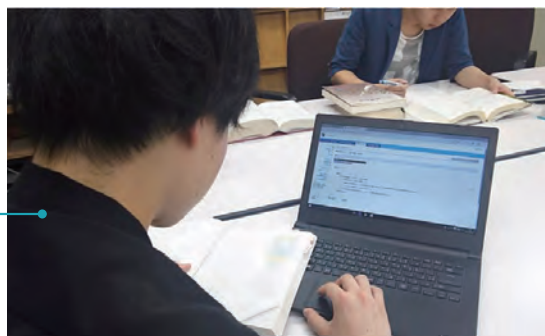
## 1年次の基礎ゼミで、 自ら学びに向かう姿勢を身につける

1年次の「分子応用化学基礎ゼミナール」の授業の多くはPBL形式で行われ、様々な実験やディスカッション、発表などを通して積極的に学ぶことで、学びがより深まるということを実感しました。(村本さん)



## 予習を充実させることで、 主体性を発揮

「WEB 予習テスト」で事前に基礎知識を理解しておくことで、授業中は学生同士の議論も活発になり、授業での学びも深まります。(松宮さん)



高度情報化、グローバル化が進む社会では、主体的・能動的に学んで知識や技術を更新していく態度や能力が欠かせない。首都大学東京都市環境学部 分子応用化学コースでは、そうした力を備えた化学者を育成するため、改革に取り組んでいる。

受動的な学修から主体的・能動的な学修への転換を促すため、1年次必修科目として設置したのが「分子応用化学基礎ゼミナール（以下、応用化学基礎ゼミ）」だ。この科目では、キャリア教育や日本語ライティング演習、化学基礎実験、化学基礎演習といった内容を組み合わせた授業を、

## PBLを通して 主体的な学修態度を育成



都市環境学部  
分子応用化学コース4年  
**村本卓也**

むらもと・たくや  
東京都立小石川中等教育学校卒業。地球温暖化の研究を希望し、入学。



都市環境学部  
分子応用化学コース2年  
**松宮和生**

まつみや・かずき  
東京大学教育学部附属中等教育学校卒業。人工光合成に興味を持ち、応用化学を志す。

週2コマ、1年間にわたり展開している。授業は、1クラス20人程度の少人数クラスで行われ、講義・実験とともに、学生の主体的な学びを引き出すためにPBL（\*）形式で行われている。4年生の村本卓也さんが、自ら学びに向かう姿勢の重要性を強く感じたのは、「応化基礎ゼミ」の化学基礎演習の授業だと言う。

「地球は温暖化・寒冷化のどちらに向かっているかというテーマで、グループごとに4〜5週かけてレポートにまとめ、発表とディスカッションを行いました。様々な文献を調べ、メンバーと議論を重ねるうちに、研究を進めていくには、主体的に考え、行動しなければならぬということに気づきました。1年次の応化基礎ゼミのPBLの経験が、今の研究の土台になっています」

## 予習を促す仕組みで 授業の充実を図る

授業での主体性を高め、より深い学びを促すため、2017年度からは、すべての必修科目に「WEB予習テスト」を導入した。学生は事前に講義範囲を予習し、WEB上で確認テストを受けてから授業に臨む。

2年生の松宮和生さんは、「きちんと準備をしていかなければ授業に乗り遅れ、理解も深まらないので、予習にも力が入ります」と話す。

さらに、学びを振り返る仕組みとして、授業後に受ける「WEB学修到達度テスト」の導入も段階的に進めている。十分に予習した上で意欲的に授業に参加し、その成果を振り返って次の授業への意欲を高める、というPDCAサイクルを確立することで、主体的・能動的な学修習慣の定着を図っている。

## 主体的な態度が支えとなり 専門的な研究も充実

1年次から、主体的に学びを深めていく習慣を身につけた学生たちは、早期に興味のある分野を見つけ、意欲的に学びを深めていくようになる。村本さんもその1人だ。

「高校時代から関心があった環境分野の科目を多く履修し、研究室では、地球温暖化の原因となる二酸化炭素を分離・回収する技術の研究を企業と協働で進めています」

2年生の松宮さんは、教養科目にも積極的に取り組んでいる。「応用化学とは異なる分野につい

て学ぶことで、多角的な視点が得られます。幅広い学問を学びながら、興味のある専門分野を絞り込んでいきたいと思います」（松宮さん）

## 海外での活動を視野に 英語教育にも注力

グローバル化への対応として、英語教育にも力を注ぐ。1・2年次には、週2コマ「実践英語」という必修科目があり、1コマはネイティブスピーカーの教員が担当し、スピーキングを中心に授業を行う。

また、応化基礎ゼミの中でも、化学英語の基礎を学ぶほか、ネイティブスピーカーの指導の下、ゼミで学んだ内容を英語で話し合うといった活動も行う。松宮さんは、「海外の論文など、専門分野の英語に触れるうちに、これから自分が取り組む研究と英語が不可分であることを理解しました」と語る。

「1年次から英語学習を積み上げてきたおかげで、海外の論文もスムーズに読めるようになりました。大学院では授業の半分は英語になるので、さらにリスニングやスピーキング力を鍛えていきたいです」（村本さん）

## 大学の思い

### グローバル社会で 活躍できる化学者を育成



分子応用化学コース  
教授  
川上浩良  
かわかみ・ひろよし

絶え間なくイノベーションが起こり続けている現代社会において、大学で学んだ知識の賞味期限は非常に短くなりつつあります。こうした社会で化学者として活躍していくために、大学時代に身につけておくべき力は、主体的に学び続ける力です。そのため、本学では、学生の主体性や好奇心を引き出す教育をいかに提供するかという視点で、様々な改革に取り組んできました。改革の中心は、1年次から導入しているPBLです。学生は知識を身につけることが学びであるという意識から脱却し、知識を活用して思考を深める学修を積み重ねます。今年度から導入した「WEB予習テスト」は、いわゆる「反転授業」を意識して、よりPBLを充実させる取り組みです。大学院を修了後、企業に就職して海外に赴任する学生も多いため、英語教育にも力を入れています。1年次から英語を使う場面を増やし、グローバルな舞台で通用する英語力の育成を目指しています。今後も社会情勢を考慮し、個々の学生の声にも耳を傾け、改革を継続していきたいと考えています。

\* Project Based Learning（課題解決型学習）の略。



# 地域に深く入り込んで実践を重ね、福祉のマインドとスキルを身につける

山口県立大学 社会福祉学部

## 座学で学んだ知識・技能を福祉の現場で生かす

「ソーシャルワーク演習Ⅰ」の訪問先は、高齢者のサロンや障害者支援施設など様々で、自分の関心のある分野を選べます。演習では予想外の出来事もあり、座学の必要性を感じました。(日高さん)

## 地域での実践を通して、自分の進路を具現化

地域団体との連絡や調整も学生が主体となって行います。地域との協働を通して、自分が地域社会で働くイメージが膨らみました。(杉山さん)



## 学生が講義の内容を考え、地域とともに福祉を考える

教師を目指すほかの学生2人と協力し、高校生向けの福祉講座を開講しました。自分の伝えたいメッセージが高校生に届き、手応えを感じました。(前田さん)



社会福祉学部  
社会福祉学科4年

**下川明香**

しもかわ・あすか  
熊本県立人吉高校卒業。  
精神保健福祉士志望。



社会福祉学部  
社会福祉学科4年

**杉山 諒**

すぎやま・りょう  
山口県立萩高校卒業。  
公務員志望。



社会福祉学部  
社会福祉学科4年

**前田凛太郎**

まえだ・りんたろう  
佐賀県立伊万里高校卒業。  
教員志望。



社会福祉学部  
社会福祉学科3年

**日高碧葉**

ひだか・あおば  
鹿児島県立屋久島高校卒業。社会福祉協議会の仕事に興味を持つ。

## 地域の福祉施設などで学生主体の取り組みを展開

山口県立大学 社会福祉学部は、学生が積極的に地域に入り、福祉のマインドやスキルを身につけるプログラムを実施している。1年次はソーシャルワーカーに必要な基礎知識・技能を身につけ、2年次以降は、地域での実習を経験していく。

2年次前期の必修科目「ソーシャルワーク演習Ⅰ」では、学生が10人程度の少人数のグループに分かれ、地域の高齢者のサロンや子育てサロン、障害児の親の会といった組織の抱える課題を聞き取る。そして、それを解決するための事業やイベントを企画立案し、実践していく。3年

生の日高碧葉さんは、山口市社会福祉協議会と連携し、高齢者のサロンでレクリエーションを企画した。

「単に楽しめるだけでなく、認知症の予防にもつながる活動を検討しました。しかし、学生の視点でよい企画だと思っても、高齢者には体への負担が大きい活動だと担当の教員に指摘され、まだまだ知識や配慮が足りないことを痛感しました」

学生が主体的に活動を運営するからこそ、多くの気づきがあり、福祉に対するイメージが大きく変わる。同じく高齢者のサロンで活動した4年生の杉山諒さんはこう述べる。

「最初は、福祉とはこちらが準備して提供する、一方的なものだと考えていました。ところが、高齢者と顔を合わせて進めるうちに反応が芳しくない場合もあり、『皆さんは何を望んでいるんだろう』と考え、企画内容を見直しました。福祉は、対象となる人と一緒に考えてつくり上げていくものだと感じました」

4年生の下川明香さんは、赤い羽根共同募金の助成を受けて、地域の高齢の女性を対象に、ドレスやメイクでおしゃれをしてもらう活動に参加し、福祉の捉え方が変化した。

「最初は嫌がっていた人が、実際にやってみると表情がパッと明るくなる姿を見てうれしくなりました。私の場合は女性のおしゃれをテーマにしましたが、それぞれの生きがいを出し、その人らしい生活を送れるように支えることも、広い意味での福祉なのだと理解しました」

### 地域とともに 福祉への理解を深める

地域とともに学びを深める一環として、2016年度から、学生が講師となり近隣の高校生に福祉に関する講義をする「はーと♡ふくし講座」を実施している。教員志望で4年生の前田凜太郎さんは、23人の高校生に対し、障害のある高校生との出会いを通して障害への理解を深めていった自身の経験を語った。

「私は福祉教育の必要性を感じており、福祉の輪を広げたいと思い実施しました。人に教えるためには10倍の知識が必要だと聞いたことがあります。本当にその通りだと実感し、必死に勉強して臨みました。高校生は障害への理解を深めてくれた様子で、『もっと知りたい』『自分もできることはないだろうかと思っ

た』といった感想が寄せられました」  
また、学生の視野を広げる活動として、09年度からは、岩手県立大学社会福祉学部との交流事業も行っている。

「岩手では、地域活性化の取り組みを紹介してもらったり、東日本大震災で被災した地域を案内してもらったりしました。福祉においても、地域性の違いがあると気づきましたし、改めて地域の防災意識を高める必要性を感じました」(杉山さん)

### 同じ進路を目指す学生が 自然に学び合う雰囲気

学生は実地体験を重ねて福祉の仕事へのイメージを膨らませ、3、4年次には具体的な志望進路を決めるようになる。同学部は、1学年約100人で比較的少人数ということもあり、同じ資格の取得を目指す集団ができ、自然と学び合いが生まれている。

「私は、精神保健福祉士の資格取得を目指しています。正課・正課外の試験対策の講座が充実しているほか、仲間同士の自主的な勉強会もあり、互いに励まし合いながら頑張っています」(下川さん)

## 大学の思い

### 地域への愛着が すべての行動の原動力になる



社会福祉学部 学部長  
横山 正博  
よこやま・まさひろ

本学部では、共感力を持って地域社会の様々な福祉課題を解決する力(本学部では、「福祉的人間力」と呼んでいます)を身につけ、地域社会に貢献できる人材の育成を目指しています。

「福祉的人間力」を身につけるため、授業の1つにソーシャルワーク演習があります。教室を飛び出して地域に入り込んで、地域の人々とともに語り合いながら、地域社会の福祉課題を解決していきます。この学びの中から成長を実感してほしいと願っています。

この成長のベースになるのが、地域の人々との深いかわりを通して育まれる地域への愛着です。出身地に戻って就職する学生も多くいますが、大学時代に愛着を持って様々な活動をした体験があれば、同じように自分のふるさとを愛することができるとは思います。

本学部の学生を見ていると、進路に迷いながらも、授業以外での地域での活動も通じて、地域に貢献できる仕事したいと意欲的に学んでいます。高校時代から、地域社会とのかかわりを持って、いろいろなことに挑戦し、自分の進路を決めてほしいと思います。

## これからの会議・研修のあり方、つくり方

今、学校現場では、次期学習指導要領等に向けて、教師にも、「アクティブ・ラーニング」の視点に基づいた教師同士の日常的な学び合いが求められている。職員会議や教員研修などで、教師集団が知見を結集し、学校をチーム化させる具体策を、現場の声や実践事例を交えて紹介する。

監修 日賀優一

「答えが1つではない問い」を考える高校生向け対話型ワークショップを開催する「三四郎の学校」事務局長。本誌2016年6月号で紹介した長崎県立諫早高校での取り組みを始め、高校教師や社会教育従事者などを対象とした学びの場づくりにも携わる。

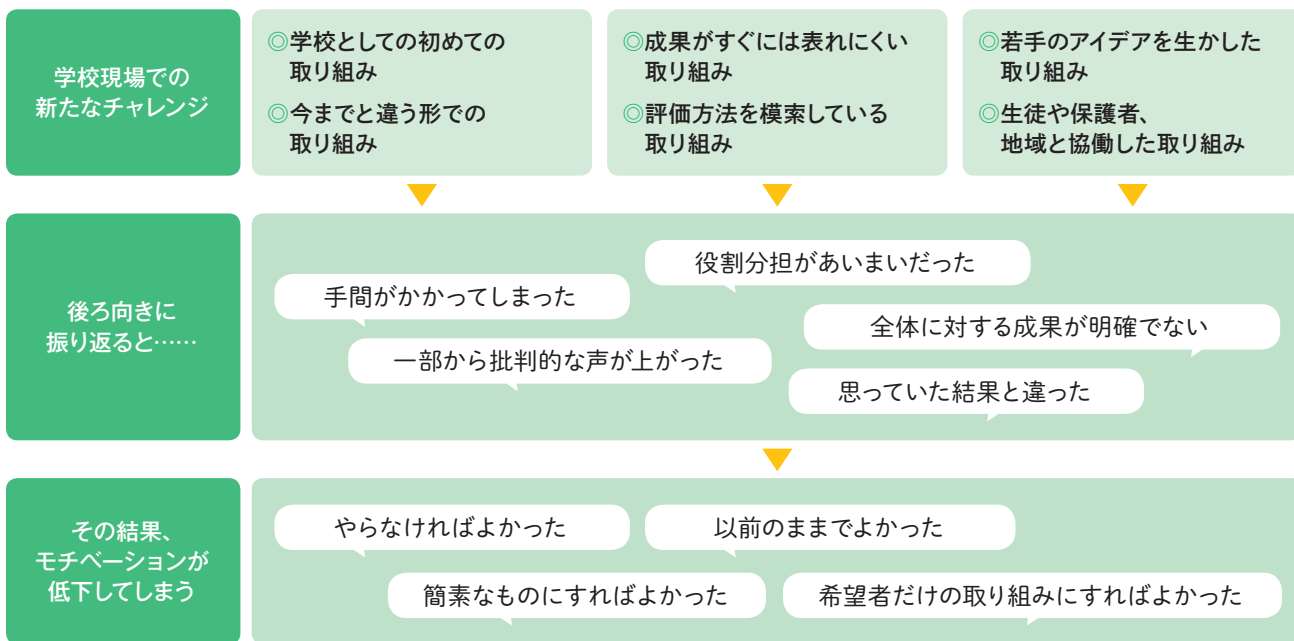
テーマ

# 前向きになれる振り返り

## 学校現場の新たなチャレンジにこそ、前向きになれる振り返りが必要

社会の変化を踏まえ、多くの学校が教育活動の改善など、新たなチャレンジに取り組んでいます。ただ、そうしたチャレンジは、成果が担保されていたり、結果がすぐに表れたりするものばかりではありません。また、生徒、保護者、地域など、立

場によってその評価が分かれることもあります。取り組みの価値を見極めるのにある程度時間がかかることについて、後ろ向きな振り返りをしてしまうと、その取り組みにかかわった人たちのモチベーションを大きく低下させることがあります。



### 振り返りは後ろ向きな反省モードになりがち

私たちが、取り組みを振り返り、評価するのは、それ以降の活動をよりよいものにするためです。しかし、振り返りが「よくなかったこと」「いま一つだったこと」を挙げることに偏ると、取り組みそのものが価値のないものと思えたり、たくさんある課題のどれかから手をつけたらよいか分からなくなったりしてしまい、改善の意欲を大きく低下させることがあります。また一方で、「生徒の目が輝いていた」といった抽象的な振り返りで終わると、取り組みの本質を踏まえた具体的な改善の検討に至らず、振り返りの場が事務的な申し送りで終わることもあります。

今、多くの学校現場で、成果がすぐに表れない取り組み、数字で評価しにくい取り組みが行われています。関係者が「引き続き頑張ろう」「次はここを工夫しよう」と前向きになり、取り組みの形骸化を防ぐためには、具体的な成果にしっかりと目を向け、組織としての肯定感を高めた上で、優先的に改善すべき事柄を共有する振り返りの場が必要であり、そこでも司会・進行役の配慮が非常に重要になります。

これからの授業のあり方などを考えるヒントを得るために校内研修として講師を招き、アクティブ・ラーニングやカリキュラム・マネジメントなどのテーマで講演を聞く機会が増えている学校も多いでしょう。参加者が受け身ではなく、課題意識を持って講演会を聞くことができる仕掛けを取り上げます。生徒向けの進路講演会などの場づくりにも役立つテーマです。

前向きになれる振り返り

# 司会・進行役が配慮する「進め方」

真摯な振り返りは、後ろ向きな反省モードでのみ成立するわけではありません。会議・研修のメンバーが前向きに取り組みの成果を認め合ってこそ、現状のよさを生かしながら、今後何を改善していけばよいかを、共通理解することができます。

## 1 まず、よかったことを数多く

取り組みを振り返る際には、「よかったこと」「このまま続けていきたいこと」をできるだけたくさん挙げていきます。改善点を先に挙げようとするメンバーには、「後でその時間を設けます」と、まずは取り組みを肯定的に捉えるための言葉を、会議・研修の参加者全員から募ります。

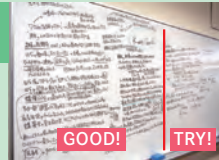
### 「よかったこと」は全員に可視化する

「よかったこと」を会議・研修の参加者全員の力で思いっ限り挙げていきますが、その際、参加者全員の前で板書することが大切です。成果を視覚的に捉えることで、「これだけ得るものがあったのだから、さらによいものとするための改善を行いたい」という、前向きな意識を参加者の内面に醸成していきます。

#### 板書の仕方

「よかったこと」 を書くスペース <b>GOOD!</b>	「改善点」 を書くスペース <b>TRY!</b>
-------------------------------------	---------------------------------

#### 実際の例



黒板やホワイトボードの大半を「よかったこと」を書き込むスペースと決め、そこを埋めてしまってから改善点を出すという流れを参加者に共通理解させます。

ある高校で教科外活動の振り返りを行った際の板書。4分の3程度を「よかったこと」で埋めてから、改善点を挙げました。

## 2 同じ内容であっても挙げていく

「よかったこと」「このまま続けていきたいこと」は、些細なことでもよく、ほかの人と同じ内容であっても繰り返し述べてよいことを参加者に伝えます。同じような成果を感じた人がいることが分かれば、それが取り組みに対する組織全体の評価であると、参加者が共感しやすくなるからです。

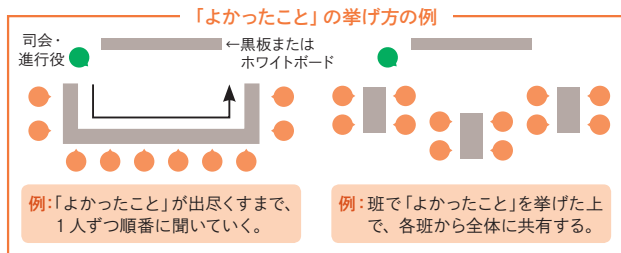
## 3 改善点は最後に、厳選して

「よかったこと」「このまま続けていきたいこと」を十分挙げたら、改善点を募ります。数は1人1、2項目程度と上限を設けることで、「優先事項」が絞り込まれます。また、この時点では取り組み全体を肯定的に評価する雰囲気生まれているので、枝葉末節な批判が出にくくなります。

### KEY-POINT

## 参加者全員の肯定感を高める

「よかったこと」は一部のメンバーだけが語るのではなく、会議・研修の場で参加者全員が語ることが大切です。肯定的な意見で「あの人はそんな捉え方をしていたのか」と、お互いの視野の広さを再発見することで、参加者相互の信頼感が一層高まるからです。



## 成果を確認して初めて課題を受け止められる

最初に「今回の取り組みでよかったこと」「これからも続けていきたいこと」を振り返ると、問題点を冷静に受け止め、改善に取り組むための心の準備ができます。多くの教師は、生徒に対してまずよいところを評価し、その後、スモールステップで改善点を示唆しますが、教師同士の振り返りにおいても、お互いを具体的に肯定し合う姿勢は欠かせません。

どのような取り組みも、1人が目にするだけで、感じることは限られます。あの生徒がこんな言葉を発した、この生徒にこんな変化の兆しが見えた、それぞれの教師が取り組みを肯定するエピソードを語り合う中で、「組織の成果」が共有されます。そうして、全員が一定の達成感を味わうことで、「この取り組みをもっとよいものにするために、まず取り組むべきことを厳選しよう」といった観点に立ち、枝葉末節にとらわれることのない本質的な課題を考えることができるのです。

ベネッセコーポレーション「現代人の語彙に関する調査」結果分析

# アクティブ・ラーニングの経験が 思考力・表現力を支える「語彙力」にも影響

ベネッセコーポレーションでは、全国の高校生から社会人までを対象に「現代人の語彙に関する調査」を、2016年から実施している。それらの結果から、「語彙力」の養成と、アクティブ・ラーニングとの間に関連性が見えてきた。

※本調査では、回答者が対象の言葉のうち「知っている」と答えた割合をその人の「語彙力」としている。

言語力は、情報を正しく理解し、自分の考えを分かりやすく伝えるために重要であり、すべての学習の基盤となる力だ。「現代人の語彙に関する調査」（以下、語彙調査）では、その根幹となる「語彙力」と行動や意識の関連性を分析している。今回はその中から高校生の「語彙力」と授業での学習活動の関係に着目して紹介する。

## 思考力や表現力との 関連が見られた「語彙力」

思考力や表現力は、学校教育法で示された「学力の3要素」（\*1）の1つであり、2020年度に導入される「大学入学共通テスト」を始めとした新しい大学入試においても求められる力となる。語彙調査の結果から、「語

彙力」はそうした力の支えにもなっているとさえそうである。図1は、思考力や表現力と「語彙力」の関連を分析した結果だ。「批判的思考力」「論理的思考力」「表現力」の各項目について、「語彙力」の高いグループの方が低いグループよりも「あてはまる」と回答した割合が高かった。

では、「語彙力」は、どのようにすれば高められるのだろうか。昨年度実施した第1回調査からは、読書量が多く、読む分野の幅が広い人や、学校の先生、学校の先輩・後輩、家族など、年齢差がある相手との会話の頻度が高い人の方が「語彙力」が高いことが分かった。読書などによるインプットだけでなく、多様な他者との会話などのアウトプットも多いことが、「語彙

図1 [第2回調査より] 思考力・表現力と「語彙力」の関係

項目	「語彙力」が低いグループ (%)	「語彙力」が高いグループ (%)	差
筆者の意見と事実とを区別して読むことができる	30.8	74.8	43.9
文章を読むとき、細部より先に大枠をつかむことができる	30.3	73.0	42.8
筆者の主張を裏づける理由や根拠に気がつけて読むことができる	30.8	73.3	42.5
筆者の主張に対する自分の意見を考えながら読むことができる	31.7	70.1	38.4
目的に応じて情報を整理し、正しい情報や必要な情報を、客観的に評価・判断できる	37.8	74.5	36.7
主張とその根拠とを結びつけた、論理的な説明ができる	25.6	62.0	36.4
文章を書いたら、読み直し、読み手にとってわかりやすく修正できる	28.0	64.1	36.1
目的に応じて自ら必要な情報を探し出すことができる	46.4	81.2	34.8
皆に何かを説明するとき、図表や箇条書きなどを加えて、わかりやすく伝える工夫ができる	27.1	59.1	32.0
その場の状況や相手に応じた言葉遣いや話し方ができる	47.6	76.2	28.7

注1) 「語彙力」が高いグループは「語彙力」が高い順に上位約30%を抽出、「語彙力」が低いグループは「語彙力」が低い順に下位約30%を抽出し、「次の文章について、どのくらい自分にあてはまりますか。それぞれについて、最も近いものを選んでください」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と答えた人の割合を比較した。

注2) 数値は、小数第2位を四捨五入して計算している。

注3) 回答者数は、「語彙力」が低いグループ347人、「語彙力」が高いグループ345人。

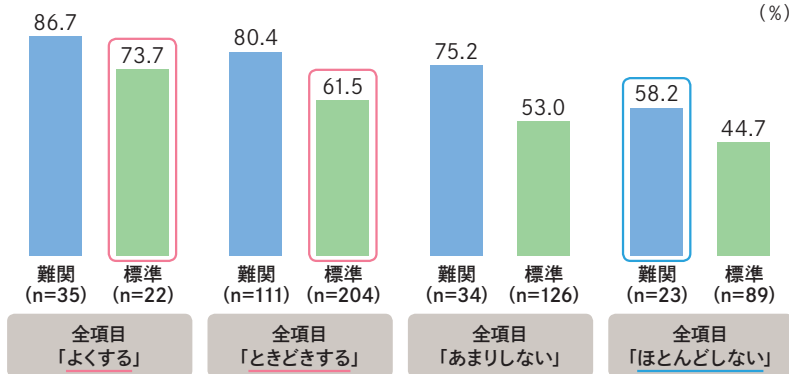
\*1 「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」のこと。

図2 [第2回調査より] アクティブ・ラーニングの経験と「語彙力」の関係 (抜粋)

項目	語彙力 (%)	差
どのように調べればよいかを考える	する (n=689) 65.6	17.3
	しない (n=351) 48.3	
調べたことを文章にまとめる	する (n=559) 66.0	13.4
	しない (n=481) 52.6	
自分の考えを図表や写真などを使って表現する	する (n=389) 68.1	13.2
	しない (n=651) 54.8	
友だちの意見を聞いて自分の意見と似ている点や違っている点を考える	する (n=595) 65.1	12.5
	しない (n=445) 52.6	
グループで活動をふりかえって何がよかったか悪かったかを考える	する (n=501) 66.0	12.0
	しない (n=539) 54.0	
学習のまとめをみんなの前で発表する	する (n=496) 65.8	11.5
	しない (n=544) 54.3	
グループで話し合った内容をまとめる	する (n=526) 65.0	10.5
	しない (n=514) 54.5	
テーマについてグループで話し合う	する (n=542) 64.3	9.5
	しない (n=498) 54.8	
学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	する (n=406) 64.6	8.0
	しない (n=634) 56.7	

注1) 質問「次のような授業での学習をどのくらい行っていますか。それぞれについて、あてはまるものを選んでください」について、各項目の回答「よくする」「ときどきする」を「する」、「あまりしない」「ほとんどしない」を「しない」として集計。  
 注2) 数値は、小数第2位を四捨五入して計算している。

図3 [第1回調査より] アクティブ・ラーニングの頻度と「語彙力」の関係 (%)



注1) 質問「授業の中で、次のような学習をどのくらい行っていますか。次のそれぞれについて、あてはまるものを選んでください」に対する項目「自分の考えや学習の成果をみんなの前で発表する / テーマについてグループで話し合う / 調べたことを文章にまとめる」を1つにまとめ、「よくする」、「ときどきする」、「あまりしない」、「ほとんどしない」と答えた各群の語彙力を、通学校のタイプ別に比較した。  
 注2) 「難関」「標準」は現在通っている学校について、回答者に選択してもらった結果による。

「現代人の語彙に関する調査」概要

- ◎ 「語彙・読解力検定」(\*2) を主催するベネッセコーポレーションが、全国の高校生から社会人までを対象に実施。
- ◎ 第1回：2016年7月、第2回は2017年7月(回答数はともに3,130人)。
- ◎ 「語彙・読解力検定」が辞書語彙(\*3)、新聞語彙(\*4)の2領域から厳選した540語の「熟知度」(\*5)を調べ、現代を生きる人々の言語活動の実態、及びその年代、生活、行動などによる「語彙力」の違いを明らかにすることで、現代人に必要な言葉の力を高めるにはどうすればよいかを検討することを目的とする。
- ◎ 詳しい調査結果は下記をご覧ください。  
<http://www.goi-dokkai.jp/research/index.html>
- \*2 ベネッセコーポレーションと朝日新聞社の主催で、社会に必要な「ことばの力」を測る検定。2011年の開始以来、累計約33万人が受検(2017年8月時点)。
- \*3 主に国語辞典に掲載されている、文章や会話を理解し、的確に表現するために必要な語彙。
- \*4 新聞に掲載されることのある、社会生活に必要な基礎知識や時事知識に関する語彙。
- \*5 調査対象の各語について、「知っている」と回答した回答者の割合。

力」につながるが見えてきた。こうした結果を得て、今回注目したのが授業と「語彙力」の関連性だ。図2は、授業でのアクティブ・ラーニング(以下、AL)と高校生の「語彙力」の関係を分析した結果だ。ALの各活動について、授業で行っていると答えた人の方が「語彙力」が高い。特に、「どのように調べればよいかを考える」「調べたことを文章にまとめ

る」「自分の考えを図表や写真などを使って表現する」では、経験の有無による「語彙力」の差が大きかった。他者の考えを聞く、資料を調べるといったインプットと、自分の考えを伝え、まとめ、発表するといったアウトプットを、ALの授業を通して日々繰り返すことが、「語彙力」を高めることにもつながるのではないだろうか。

また、学力によらず、ALが「語彙力」を高めることに結びつく可能性も見えてきた。図3は、ALの頻度と「語彙力」の関係を分析した結果だ。授業でALを「よくする」「ときどきする」と答えた「標準」の高校生の方が、ALを「ほとんどしない」と答えた「難関」

の高校生よりも、「語彙力」が高かった。ALを実施している方が、学力にかかわらず「語彙力」が高いという結果は、ALの「語彙力」育成の有効性を示すものと言えそうだ。今後さらに育成が求められる思考力や表現力とも関連が深い「語彙力」。ALの導入によって「語彙力」を高めることは、新しい入試への対応にもつながるだろう。

## 2017年8月号・特集へのご意見

### 教科間の連携が課題

自校でも、学校教育目標の実現に向けて、教育活動計画をどのように立てていくか、今まさに模索している。教育課程で示した教科・科目の授業を通して、生徒にどのような力を育てていくのか、修正を加えながら検討する中で、教科間の連携を図ることが最も難しいと感じている。 東京都・私立東京農業大学第一高校 小堀健一

### 全教師を巻き込むことが組織に活力を生む

本校でも、学校教育デザイン検討グループを結成し、動き出した。「本校の生徒にどのような資質・能力を育みたいか」について話し合う中で、今まで行ってきた教育活動を見直し、その骨組みをどうつなげていくかを議論していくと、これまでの教育活動の目的が整理されていった。そして、教育課程を検討していくためには、全教師を巻き込んでキーワードを決めることが最も重要であるという結

論が出た。それが組織に活力を生むという考えを複数の教師が持っていること確認できたことは、大きな財産になった。また、組織が変化しても活動内容を発展させていくためには、明確なビジョンと本校のストーリーが必要であることも確認できた。 広島県立広島観音高校 長光優樹

### 教師が生徒から学ぶ機会に

山梨県立吉田高校の取り組みは、今後、各校で取り入れていく価値のあるものだと感じた。生徒自身が、対話を通して教育目標や教育活動計画の意味を主体的に考えることによって、毎日の学校生活の目的や意味を理解し、納得して3年間を過ごすことができるのではないだろうか。また、教師側の考えとは異なる考えが、生徒側から出てくるかもしれないが、教師と生徒の考えをすり合わせていくことで、教育目標や教育活動計画をよりよいものに練り直すことができると考える。それは、教師が生徒から学ぶ絶好の機会にもなり得ると思う。

福井県 匿名希望

### 教育ちょこっとトーク



テーマ  
生徒以上に  
熱中してしまった  
学校行事での  
エピソード

- ・生徒会担当の時、学校祭の企画・運営で、生徒同様に張り切ってしまう、当時の生徒たちに「先生は、少し見守ってください。全部、僕たちでできますから」と言われてしまった。 静岡県
- ・体育祭の学級全員リレーでアンカーを担当。生徒が1位で走ってきたのに、

私が抜かれて2位に……。次の日から1年間、走る練習をした。 鹿児島県

- ・文化祭でクラスの出し物として演劇をすることになり、私も劇の小道具作りを手伝った。ところが、ものづくり心に火がついてしまい、凝ったものを作ってしまった。 沖縄県

## 『VIEW21』高校版・読者モニター 募集中

『VIEW21』高校版についてのアンケート等にご協力いただける先生を募集しています。読者モニターにご登録いただいた先生に毎月お送りする定例のアンケートにご回答いただくと、1回につき500円分の図書カードを謹呈いたします。

〈個人情報の取り扱いについて〉をご確認いただき、下記のいずれかの方法でご応募ください

- ① 下記2次元コードを読み取ってアクセスいただき、必要事項をご記入の上、ご送信ください。



- ② 学校名、お名前、分掌、ご教職歴をご記入の上、下記のe-mailアドレスにご送信ください。  
view21\_since-1975@  
@mail.benesse.co.jp

〈個人情報の取り扱いについて〉『VIEW21』高校版・読者モニター募集でご提供いただく個人情報は、アンケートの集計・分析によるVIEW21誌面評価、企画開発、VIEW21誌面・ウェブサイトへの掲載、教育情報の提供ならびに謝礼の発送の目的で利用いたします。お客様の意思によりご提供いただけない部分がある場合、手続き・サービス等に支障が生じることがあります。また、商品発送等で個人情報の取り扱いを業務委託しますが、厳重に委託先を管理・指導します。個人情報に関するお問い合わせは、個人情報お問い合わせ窓口（0120-924721、通話料無料、年末年始を除く、9時～21時）にて承ります。  
(株)ベネッセコーポレーション CPO（個人情報保護最高責任者）  
上記をご承諾くださる方はご送信ください。

### 編集後記

3号連続で特集に取り上げさせていただいた山梨県立吉田高校の実践はいかがでしたか。一連の取材や打ち合わせで同校を訪れたのは10回近く。その間、記事の製作等も含め、何度も吉高GPを目にしてきましたので、8つの力はもう完璧です！それは、8つの力に日々接している同校の生徒なら、なおさらのこと。今回取材した生徒からもスラスラ出てきましたし、校内の掲示物からもそれを感じました。写真は、8月号の記事の最後に触れた、夏季休業前に実施された学年縦断のグループでの8つの力についての話し合いのアウトプット。同校が育成を目指す資質・能力の意識は、生徒にも着実に根づいています。(柏木)



VIEW21 高校版 2017 12 月号

次号は 12月11日発行 (予定)

『VIEW21』高校版は年6回の発行です

## 教師を育てた 言葉たち

No.004

### 愛媛県・私立聖カタリナ学園高校 中本幸太先生

なかもと・こうた

◎教職歴13年。同校に赴任して14年目。3学年担任。地歴・公民科教科主任。

**聖カタリナ学園高校** 全日制／普通科・総合学科・看護科・看護科専攻科／共学(2015年度まで女子校)／全校生徒1353人／2017年度入試合格実績(現役のみ)：国公立大は、広島大、愛媛大、長崎大に3人が合格。私立大は、中央大、法政大、立命館大、関西大、松山大などに延べ218人が合格。



**教** 職2年目に初めて担任を持つことになり、自分らしさを出そうと、毎朝、黒板に生徒へのメッセージを書くことにしました。「おはよう」に始まり、よいことを褒めたり、気になることを注意したり、連絡事項を伝えたりと、生徒とのコミュニケーションツールの1つになればと考えたのです。しかし、数か月すると、毎日書くことに意味を見いだせなくなっていました。例えば、「静かにしよう」と書くと、その日は改善されましたが、翌朝書いていなければ元通りという状態で、自分が何を言っても生徒には伝わらないのではないかと悩みました。

そんなある日、職員室で作業をしていた私の隣に、担任クラスの数学科担当の先輩先生が座られました。私は「うちのクラスの生徒がご迷惑をかけていませんか」と相談し、「メッセージをやめようかと悩んでいる」と打ち明けました。すると即座に、「**誰か1人は見ているんじゃない? その生徒のために続けたら**」と言われたのです。「ルールを守らない生徒に目が行きがちになるけれど、きちんとしている生徒こそ意識して見ていかないと」という言葉に、はっとさせられました。

**そ** の後すぐ、先輩先生の言葉を実感する出来事がありました。私がやむを得ず学校を2日間休んだ翌日、生徒から「メッセージがなかったから、先生に何かあったんだと思いました」と言われたのです。「見ている生徒はいる。だから、何があっても続けよう」と、私は決意しました。

一人ひとりと向き合う大切さも、生徒に教えられ

ました。担任2年目、遅刻欠席がなく、授業態度も真面目な生徒から「私が頑張っても、先生は褒めてくれない」と言われたのです。また、数年前には、私の発言が思わぬ生徒の誤解を招き、そこから生徒たちとの関係がうまくいかなくなり、黒板のメッセージが数回消されるようなこともありました。

私は、クラス「全体」をよくしたいと思うあまり、目立つ生徒のことばかりを気にかけていました。しかし、「個」を大事にしなければ、全体がうまくいくはずはないのです。一人ひとり違った人間が集まるのがクラスで、同じ言葉でも受け止め方は様々です。そして、生徒は教師の言動を想像以上に聞き取って、喜びや悲しみを感じています。生徒との接し方には正解がないからこそ、これでよいのかと悩みながらも、生徒の表情や発言、行動にきちんと目を向け、気になったことは後回しにせず、すぐに行動に移すことを意識するようになりました。

**14** 年目の今も、毎日欠かさず黒板にメッセージを書き続けています。卒業生やクラス替えとなった生徒から「メッセージ、毎日見てました」と言われる時、改めて1人の存在に気づけます。

書く内容は、今も変わりません。でも、伝えたい生徒を思い浮かべながら、全体に向けた言葉にしています。「個」をよく知れば、クラス「全体」に投げかける言葉も自然と変わっていきます。そうすれば、「個」も影響を受けて、「全体」のことを考えて行動してくれるようになる。そう信じて、これからも一人ひとりと向き合っていきたいと思います。

VIEW21の  
バックナンバーを読みたい

VIEW21を  
より多くの先生で読みたい

そんなときは!

VIEW21をBenesse High School Onlineでもご覧いただけます。

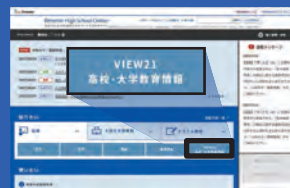
## Benesse High School Online

高校の先生の課題解決をサポートする情報サイト

過去の冊子がお手元がない場合や、より多くの先生でご共有されたい場合に、ぜひBenesse High School Onlineをご利用ください。 ※Benesse High School Onlineのご利用は無料です。

### アクセス方法

- 1 各種検索エンジンで「ハイスクールオンライン」と入力して検索  
ハイスクールオンライン    
(ご利用には、学校ID/ログインコードもしくは先生個人ID/パスワードが必要です。)
- 2 ハイスクールオンラインにログイン後、トップページの「知りたい」>「指導」>「VIEW21」をクリック



## 『VIEW21』公式アカウント LINE@ スタート!

最新情報や時期ごとにオススメのコンテンツをLINEで配信! 右の2次元コードを読み取っていただくか、「友だち追加」にて「@view21」でID検索して、『VIEW21』公式アカウントのLINE@を友だちに追加してください。

@view21

でID検索!



ハイスクールオンラインに関するお問合せ

WEBサポートデスク

**0120-350124**

受付時間/月~金 8:00~19:00 土 8:00~17:00 (祝日、年末・年始を除く)

# VIEW21

ビュー-21 高校版 Volume4 2017年10月号

2017年10月16日発行/通巻第366号 発行人 山崎昌樹 編集人 春名啓紀 発行所 (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

VIEW21編集部 〒163-0411 東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビルディング13階

©Benesse Corporation 2017

お客様  
サービスセンター

【フリーダイヤル】 **0120-350455**

受付時間 月~金 8:00~19:00 / 土 8:00~17:00 (祝日、年末・年始を除く)

株式会社ベネッセコーポレーション岡山本社 〒700-8686 岡山市北区南方3-7-17